

---

# Dropbehind

ziure

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Dropbehind

### 【Nコード】

N0209Z

### 【作者名】

ziure

### 【あらすじ】

魔法が存在する世界の物語。魔法に特化する存在『六家』。その六家の中の一つの火神家から生まれた哲也。彼は魔法の力がなく火神家の一人として認められず家を追い出される……そして強くなつた哲也は学園へ足を運ぶ…… 処女作です。駄文です。落ちこぼれからの主人公最強です。誤字・脱字よくあるかもです。それでも良ければぜひ温かい目で見てやってください。R・15、残酷な描写については保険です。

## 第一話 落ちこぼれ

この世界には魔法が存在する。魔法を使うには才能がいる。その才能は血縁の関係も大きく影響することが長い期間をかけて知られた。

その様々な血縁すなわち家系の中で火・水・土・風・光・闇、各属性ごとに特化する存在がいくつかあった。

それらから5年に1度各属性ごとに能力が高い家系を1家づつ取った存在。

人々はそれらをまとめて『六家<sup>りくけ</sup>』と称した。

俺はその時『六家』の中の一つだった火に特化した家系 - 火神家

- の長男として生まれた。

名前は哲也<sup>てつや</sup>。

俺は生まれてからしばらく2つ年上の姉と同年の双子の妹と過ごしていた……

俺が6歳の誕生日を迎える時、魔法の測定を行った。(この世界では6歳から12歳までの間毎年魔法の能力値を測るために様々な測定を行う)

俺の測定結果は普通の人たちと比べても低い結果だった。姉や妹はその測定で飛び出した結果をだしていたのにもかかわらず……

俺は自分が上手く魔法を使えてないのは前から知っていた。

両親や姉、妹からもよく教えてもらってたけど、成果はみられなかった。

でも、姉がいい成績を残していたから、俺にもいい結果が出てくれると少しだけ期待していた。

火神家の長男としていい結果がほしかった。  
自分の劣等感から抜け出すためにも、<sup>すがり</sup>縋りつく結果がほしかった。  
この測定は現実が甘くない事を思い知らされた時だった……

そして測定結果が届いた夜の日の出来事??

「哲也、食事が終わったら私の部屋に来なさい。大事な話をする」  
俺が、「はい」と返事をした後父は食べ終えた自分の食器を片づけて自分の部屋へと戻っていた。  
俺はなんだろうと不思議に思いつつ待たせるのも悪いので残った飯をいつきに腹に入れ込み父の部屋へと向かった。

コンコンと2回ノックをして「入っていいぞ」という声を聞きドアを開く。

俺はそのまま父が座っていたソファアのテーブル越しの向かい側に座る。

それを確認した父は、喉を潤すようにテーブルにあったコーヒーを一口飲んでまじめな顔を向けてきた。

俺にはなんだかその顔、いや雰囲気怖さを感じてしまった。これから言われる言葉が自分の身体にはわかっていいるのかのように……

「お前には……この家から、出て行ってもらう」  
「え……?どういう、ことですか?」

身体とは違い俺の頭は唐突過ぎて意味が良く理解できていなかった。  
いや、理解したくなかった。

父はそんな俺に追い打ちをかけるかのように、

「お前にはこの家の名を名乗る資格がない。要するにこの家から出て行ってもらおう。これからは自分の好きな苗字を付けるといい。ただ二度と『火神』とは名乗るなよ。これは餞別だ。話は以上。明日の早朝までに出ていけ」

伝えることを淡々と告げられる父からの言葉は、今までで一番冷たかった。俺は父の雰囲気萎縮されて何もできなかった。

父はそのまま俺にかまわず席から立ち上がり部屋を出て行った。バタンというドアの閉まる音が妙に寂しく部屋に響いた。

数時間後、俺は餞別としてもらったお金を鞆に入れその日のうちに準備をし、夜遅くに誰にも気づかれぬように家を出た。その日の月の光は妙に冷たく感じてしまった。

涙は不思議と頬を伝う事はなかった……

あの日から1ヶ月くらいだろうか……

父からもらったお金もすでに無くなっていった。俺はそこら辺の隅でうずくまって泣いていた。

未だにあの日のショックから抜け出すことはできない。

「おい、その君」

誰かが話しかけてくる。

相手から話しかけてくるなんて久しぶりだ……そんな事を思いつつ俺はゆっくりと顔を上げる。

そこには一人の若い大人の女性がいた。黒目黒髪でこの世界では珍しい容姿だ。顔は見るからに美形。

背はそんなに高くないがプロポーシヨンについては出るところはしっかりと強調されていて誰が見ても綺麗という感想を持つだろう。

「一人で泣いて……何があったの？」

「父に家を追い出されました」

「どうして？」

「僕が弱いから……ただの落ちこぼれだったから……」

「もし行く宛がないんだったら私と来ない？」

「えっ……？」

意味が良く分からなかった。

「私の所に来るかっつて聞いたの。君は弱くも落ちこぼれなんかでもない。私なら絶対君を強くすることができる！君には強くなれる素質がある。そんな君の才能を見抜けないむかつく父を見返してやるために私が鍛えてあげるよ」

俺に素質……？才能……？

しかも今はお金がないし、いる場所もない。これは俺にとってすごい好条件なんじゃないだろうか。

俺はとりあえず聞いてみた。

「付いて行ってもいいんですか？」

「んー……やっぱいいやだ」

「ええっ!？」

驚愕した。

「冗談だよー」

ホツとした。

「ふざけないでくださいよ……」

「ごめん、ごめん。ちなみに名前は楠木香織<sup>くすのきかおり</sup>。呼び方は……姉さん  
って呼んで。むしろそう呼んじやいなさい」

「分かりました。よろしくお願いします、姉さん」

「うん、よろしくね」。それで君の名前はなんて言うの？」

「哲也です」

「苗字は？」

ちよつと考え……そして決めた。

「楠木です」

「そっか、んじゃ行こう哲也」

「どこにですか？」

「強くなるための修行に」

「はい。でも、俺って強くなれるんですか？」

今更ながらの疑問である。さっきも俺に素質あるだの才能だの言っ  
てたし……

「もちろん！ただ私の修行にきちんと耐えられれば、ね」

「耐えてみせます。強くなれるならどんなに厳しくても！」

「その調子ならきつと大丈夫よ。改めてよろしくね哲也」

「はい！」

俺はそこから歩き出す……

誰よりも強くなるために……



## 第一話 落ちこぼれ（後書き）

感想・評価等いただけたらうれしいです。

## 第二話 姉さん（前書き）

開いてくださりありがとうございます。

早速お気に入り登録してくださった方、本当にありがとうございます。

誤字脱字あったら報告お願いします。

## 第二話 姉さん

あれからしばらく時間がたった……

俺は今15歳になり、背も伸びて身長は170前後。髪は赤色のショートで目は茶色っぽい。顔は姉さん曰く「かっこいいんじゃない？」だそうだ。身体は自分で言うのもなんだが、かなり筋肉は付いていると思う。修業の成果だ。

俺はずっと姉さんこと楠木香織に森の中でずっと鍛えてもらっていた。

まさか一度森に入ってそのままずっと森を出ることなく修行漬けの日々だとは思っていなかった……

そして俺は今、王国に向かって歩いている。どういふ事情かと言われれば、それは昨日の朝に遡さかのぼるのが一番分かりやすいだろう。

.....

いつものように朝食を食べる俺と姉さん。朝食時の団らんといふように、他愛もない会話を重ねていく。その中で今日の修行の内容を聞いてみたら、

「今日は私との1対1よ」

「マジ？」

しばらく時間もたってからねえさんとの会話には敬語はほとんど使わないようになった。

俺からすれば本当の姉のようだったし、姉さんは姉さんで敬語を使われるのはあまり好きではないらしいからだ。

それはそれとして俺がなぜ1対1というよくある手合わせの形式の鍛錬内容に一言目で頷かないのかと言うと、力に差がありすぎるからである。姉さんはマジで強い。だから今の俺ではまったく相手にならないと思う。

確かに強い相手との戦いは学ぶことも多いのかもしいが、差がありすぎてはどうなんだろうと考えたからだ。

「マジよ。ルールは……なんでもありでいいか」

そして軽いノリで言われた言葉に俺は冗談抜きでビビる。なんでもありとか俺死ぬかも……

「いやいやいや。よくないから！明らかに絶望という文字が目前に見えるから！せめて少しでもいいからハンデつけてよ！」  
だから、必死になってしまつたのかもしれないだよ。

「ちなみに拒否権はなしだし、ハンデもなし。これは私があなただの師として課す最終試験だから。これ食べ終わったら早速始めるからね」

拒否権なしそしてハンデなしという言葉に俺は意気消沈してしまつたが、ともに言われた最終試験という言葉に自分のさっきまでの考えを無理矢理にでも切り替えさせた。

そして朝食を食べ終え、食器を片づけた後外に出た……

「さっきも言つたけどこれは私との修行の最終試験だから、当たり前だけど手を抜くなんて考えないでね」

その言葉を最後に姉さんから感じる殺気によって……俺は自然と身構えた。

「始める前に言っておくけどマジでやるから。死なないように気を付けてね？」

最後の言葉はおどけるような口調で言われただけが、放たれている殺

気が和らぐことはない。

「そういつわけだから、真面目にね。じゃないと……ホントに死ぬよ?」

姉さんから出ている殺気がさらに膨れ上がる。その殺気に震えている自分を自覚しつつ、そんな自分に喝を入れるため頬を両手で一回パンと少し強めに叩き気合いを入れ改めて構える。

「じゃ、始めるよ?このコインが地面に落ちたらスタートね」  
「わかった」

姉さんはそのコインを俺に見せてから、親指に乗つけて、弾く。

チンツという音を立ててコインは上に舞い上がり、そして重力により地面へと落ちていく。

そして落ちた瞬間、同時に二人が動き出した……

目を覚ましたら、俺は仰向けに倒れていた。

数分の攻防の後、俺の精一杯の一撃を与えた後は防戦一方となってしまうすぐやられてしまった……

しかし、よくあの一撃が当たったもんだと思う。わざと避けずに受けてくれただけかもしれないが。実際俺の一撃を受けた後、姉さんが満足そうな笑みが見えたような気がするし。

もしそうだとしても一撃を与えたことは嬉しかった。あの姉さんに一撃を与えられたことに。負けたのは悔しいけど……まだまだ自分

には修行が必要だということが分かった。

思考するのをやめ、顔を動かして前を見てみると、姉さんは俺の目の前でニコニコしながらそこに立っていた。

なんなんだ？と思いつながら無理矢理体を起こそうとする。俺が体を起こそうとしている様子を見て姉さんは手を貸してくれる。そして、近くにあった木に背を預けさせて俺を座れさせた後、一呼吸置いて言ってきた。

「合格よ」

「はい？」

いきなり言われた合格という言葉に俺の頭はついていけてなかったため素っ頓狂な返事をしてしまう。

「だから合格よ合格。あなたは私の弟子として最終試験に合格しました」

そんな俺に再度合格という言葉をかけてくる。

「どうも」

こういうときは素直にその言葉を受け取るべきだろうと思ったのでとりあえずは受け取った。

しかしなんとも納得しづらい、というかよく分からない。勝てるとは思ってないけどあんなぼろ負けしたのに合格って……姉さんの基準が分からない。

「なんだよー。もっと喜んでくれて良いのに……まあいいか。というわけで君にはこれから私が指定する魔法学園に行ってもらいます」「はいはい……って、ええっ……！」

適当に相槌をうつっていたら、まさかの展開に驚いた。

「そんなに驚くことじゃないでしょ。学園なんて普通は行くところじゃない」

「それは驚くよ。学園って普通は12歳になったら入るところじゃない。それなのに今までずっと何も言われなかったし、そのまま鍛えてもらって一人前として認めてもらったらギルドとかに登録するかと思ってた」

――魔法学園とは文字通り魔法について詳しく学ぶ場所となっている。世界の状態や歴史についても学んだりする。大体は魔法について学びたい人が入るところで、入学できるのは12歳から。第一部で3年、第二部で3年の計6年間みっちり学ぶ。ちなみに第一部と第二部はエスカレーター制となっていて第一部を卒業すると次の年にはそのまま第二部の一年生として勉学に勤しむギルドについては……簡単に言うとランク付けされている自分に合った仕事の依頼を受け、それをこなすところ。まあ後々出てくるのでその時に詳しく説明しよう。

――「ギルドって言うのも考えたけど、哲也には世間についてもっとよく知ってほしいからね。後は人との交流の楽しさも」

「15歳になって今まで学園に行ってなかった俺が入ってもやっていけるの？てかまず入れるの？」

自分の思ってもな疑問を問いかけてみた。

「入れるよ。試験とか少しあるかもだけどなんとかなるレベルには魔法について教えてるし。もしダメだったとしても私が無理矢理入れるようにするから安心して」

全然安心できないじゃん！というつつこみはなんとか押さえたが、その代わりとも言うように仮に試験があつたとしても絶対合格してやると言う意思が生まれた。

「姉さんって、そんなに権力ある人なの？」

「さあどうでしょうね。私の素姓なんて探らなくていいから！てな訳で入ってもらうからね」

何が「てな訳で」なのかよく分からないが……

「こんな俺でも大丈夫なの？」

落ちこぼれだった俺は姉さんに鍛えられて強くなったのかもしれない。けど、あらためてそういう環境に行くのは腰が引ける。それに親からの言葉を思い出すとどうしても自分がダメに思えてくる。そう考えるとだんだんと落ち込んでくる……自信が失われていく……

「大丈夫だから魔法学園行きを勧めてるんでしようが！私の弟子と

しての合格をあなたに出したんでしようが！もつと自分に自信を持ちなさい！哲也ならやれるわ！私の、この楠木香織の一番弟子なんだから！」

そんな俺を見かねた姉さんは最初は少し怒ったような、そしてだんだんと元気づけるような口調で言ってきた。俺はうれしく思った。それに一番弟子という言葉が俺の胸にすごい響いた。不思議と自信がこみ上げてくる感じだった。

「そうだよな！俺、行くよ……学園に！！」

「それでこそ我が一番弟子！じゃあ学園に行くための準備をしましよう。明日の朝にはここを出発してもらいますよ」

なぜに丁寧語？と思ったがそれは置いておく。

というか明日にはここを出発するのか……明日の朝ねえ……

……明日？

「明日！？すごい急じゃん！！」

「しょうがないじゃない、そうしないと哲也が行く学園の第二部の入学式に間に合わなくなるのよ」

「分かった……とりあえず準備してくる」

もし俺が姉さんの最終試験に合格できなかったらどうするつもりだったんだろう……と心の中で考えていたがすぐに考えるのはやめた。背中にある木を上手く使いながら立ち自分の足だけで歩けるくらいに回復したことを確認してフラフラしながらも家へ向かった。

「はいはい、っているいろと私も準備しないと……！」

姉さんも俺の後を追うように家に向かった。

なんてそうこうしているうちに朝を迎えた……



俺は2階からいつものような足取りで1階に下りて来てテーブルの椅子に座る。

昨日の傷については家に戻った後すぐに治癒魔法で姉さんにほとんど完全に治してもらった。疑問として「なんですぐ治してくれなかったの？」と聞いたら「忘れてた」と言われた。いたずらに舌を出すおまけつきで。

姉さんはテーブルに俺の分と自分の分の朝食を置き自分の椅子に座る。

お互いに手を合わせてから、

「いただきます」

ここでの最後になるかもしれない食事を口いっぱい頬張る俺。そんな俺を見て微笑み自分のペースで食べ始める姉さん。今日は特に会話が生まれない……

しばらく沈黙が続きそんな空気を先に破ったのは姉さんだった。

「はいこれ、私からの入学祝のお金と剣よ。受け取ってね？」

俺が1階に来る前に準備してあったようでそれを取り出して俺に渡してくる。俺はその袋に入っているお金の量に驚く。それにこの剣は姉さんの愛用していた剣……

「まだ入学できるか分からないし。それにどっちにしろこんなに沢山はつけ」

「拒否権はないから、ね」

「分かりました、ありがたく受け取らせてもらいます」

姉さんは目が笑ってない笑顔をこちらに向けた。その笑顔からはある意味ではあの時のさっきよりも恐ろしいかもしれない。ホントに怖くて拒否という行動が出来なくなってしまう……

「それとこれ」

差し出されたのは一枚の封筒

「これは？」

「学校に着いたら学園長室に行つて、これを絶対忘れずに渡してね。そうすればたぶん普通に入れる」

「うん、分かった」

「あとこれ。学園までの地図ね」

「なにからなにまでありがとう」

ホントに心の底から思った感情をそのまま言葉にして伝えた。

「いやいや、一番弟子のためだからね」

姉さんはそう言つて微笑んできた。俺はその微笑みをついじつと見つめたままになつてしまった。

こうやつて改めて見るとホント綺麗な人だと思う。思わず、

「ほら、私に見惚れてないで。そろつと出発しないといけないんじゃない？」

「そ、そうだね」

不覚にも姉さんに見惚れてしまいそうになつてしまった俺は、照れ隠しのように残つた料理をすべて食べきつて椅子から立ち上がった。

「じゃあ、行つてくるね」

「うん、行つてらっしゃい」

別れはともあつさりとしたものだった。

そうして俺は家を出た……魔法学園に向かうために……

.....

という感じだ。つまり俺は今魔法学園に入学するために王国へ向かっている。

しかし王国までの道のりもまだまだ長い。

魔法学園か……不安も多いけどちょっとは楽しみだ。

そんな感情を持ちながら、俺は平原が広がる大地を駆け出した……

## 第二話 姉さん（後書き）

姉さんとの戦闘シーンをとばしたのはここで主人公の技等を暴露してしまつとすぐにネタギレしちやいそうだったからです。作者のアイデアのなさをお許しください。治癒魔法などのこの世界での魔法の解説はもう少ししたらやるので今はスルーしておいてください。重ね重ねすいません。

感想・評価して頂けたら嬉しいです。

### 第三話 学園長（前書き）

開いてくださりありがとうございます。

新たにお気に入り登録してくださった方、ありがとうございます。

誤字脱字あったら報告お願いします。

### 第三話 学園長

俺は今校門の前に立っている。

こうやってじっくり見てみるとなんとというか……めっちゃでかい。

その大きさに俺は圧倒されていた。

お口あんぐりとはこのことなのだろう……そんなことを思いつつ俺はもう一度その学園の校門に書かれているこの学園の名前を改めて確認する。

……王立第六魔法学園……

最低でもこんなのが後五つもこの国にはあるのか……さすがは王国、マジででかい。

まあこれ以上こんな事を考えるのはやめて俺は校門をくぐり学園内へと入っていった……

そして姉さんの言う通りにまずは学園長に会うために学園長室に向かった。いや、向かおうとした。

考えてみれば場所が分からないのだ。下手に探してもこの無駄に広い学園に迷ってしまう可能性も高い。

とりあえずは案内板を見つけるか、この学園関係の人を誰かしら見つけて聞いてみようと思いつつ冷静に周りを見渡したら……すぐ近くそれはあった。

なぜすぐに気付かなかった……と思ったが、俺は自分が思っていた以上に緊張してたことに今ようやく気付いた。

それも仕方がないことだろう。なにせ落ちこぼれだった人間がこんな立派な学園に来て緊張しないわけがないし、そもそも一般的な生徒でもここに入るときには緊張することだろう。

そして俺は緊張の面持ちのまま、そのまま真っすぐに『学園長室』と書かれたプレートがある扉の前に立ちコンコンと二回ノックをして中からの返事を待つ。

中から「どうぞ〜」というなんとも学園長に似合わない（自分のイメージだが）なんともおっとりとしたかわいらしい声が聞こえてきた。もしかしたら秘書とかそういう類かと考えながら、

「失礼します」

と礼儀に反さないようしつかりとした声をかけ、扉を開く。

「どうぞどうぞー。とりあえずそこに座って。それからお話ししましょう？」

さっきの声の主の人だ……この人が学園長なのだろうか……

「はい……わかりました」

いや学園長がこんなにちっちゃくて可愛い人なわけがない。自分の想像だためっちゃ怖い人だと思つてたし……

ちなみにこの人の容姿は、目測だが140あるかどうかぐらいの身長で、体型は……まるで小学生のよう。顔はどう見ても可愛いといわれるだろう。髪型は金髪でツインテール。みんなから可愛がられてそんな雰囲気だ。

俺はこの人がどんな人なのか考え観察しながら、言われた通りにそこにあつたソファアに座る。

そんな視線を感じ取っているのかいないのか、なんともかわいらしいしぐさを見せつけるように俺の向かい側に座る。

「私がこの学園の学園長の佐伯舞<sup>さえきまい</sup>。見た目はちっちゃいけどちゃんと学園長です。まだこの職について二年目だけどそこら辺は気にしないでおいってください。それでここに来た用件はこの学校に入りたかって事でいいのかしら？」

自分からちっちゃいのはあっさり認めてちゃっかり学園長アピール。つてこの人が学園長なのか……やはりどこから見てもそうは見えない。そんな驚愕の事実（俺からしたら）をあっさりと言われてしまった。

人は自分のイメージからかけ離れすぎているとそれを事実としてうまく受け入れることができないというが、それを身をもって思い知らされてしまった。しかしここで受け入れていかないと先が思いやられるのでなんとかその事実を受け入れ、そしてさっき聞かれた問いに答える。

「はい。僕を育ててくれた人に、ここに来るよう言われてきました。後これどうぞ」

俺は姉さんからもらった封筒を自分の鞆から取り出し学園長に渡す。「じゃあ、拝見しますね……」

学園長は俺から封筒を受け取りそこから手紙を取り出すしてそれを読み始めた。

さっきの雰囲気から一転して、真剣な眼差しをしている。

沈黙が流れる中数分が経ち、学園長は手紙を読み終えたようでテーブルの上に手紙を置き俺に視線を移す。

「内容は分かりました。実力的に問題なさそうなので第二部からの入学を許可します。試験とかは主に私がめんどくさいので試験とかはなし」

「なんだか学園長にあるまじき発言をしているような……」

「それでいいんですか？」

「あなたが楠木香織に手紙通りの手ほどきをうけたなら問題ないでしょう。別の意味で問題があるかもしれませんが……あ、悪い意味ではないから安心してください。それじゃあ、これからこの学園について説明したいと思いますが構いませんか？」

この人姉さんを知っているっぽい……少し気にはなるが今は聞くところではないと思い、学園長の問いに答える。しかしさっきまでと雰囲気や口調が変わっているなと思った。

「はい。大丈夫です」

俺の返事を聞き、学園長は説明を始めた。

「じゃあ大体は知っていることを前提で話すけど、ここは学園名の通り王国が建てた六つ目の魔法学園です。魔法を使う人たちは、若



「この学生時代が一番伸びる時期と言われています。そのために生徒達が良い環境の下で、生徒同士で切磋琢磨しあつて、成長していく場。そんな環境を作るために建てられました。騎士になるにしても、ギルドに入るにしても魔法は、その人の個人の強さを決めると言つても過言ではないステータスになります。そんなわけでこの学園では、主に魔法の理論や構造を知り、実際に魔法を使つたり、生徒同士の模擬戦を行つたり……要するに魔法を常に軸として教育していきます。でも魔法だけではなく、普通の学校としての教育もしっかりと受けてもらいます。当然友達と仲間とクラスメートと過ごす日々の楽しさなども。要点だけいうとこんな感じですよ。なにか分からないこととか、知りたいこととかないですか？」

一通り決まつたような説明を言つてもらつた。話す姿はさすがいちようは学園長という感じだった。最初の会話でいい加減そうな感じの人かと思つたが、それはあの人の性格上仕方ないこと（それでいいのか？）で学園長としての公と私の区別はしっかりとついているみたいだった。

それは兎も角、疑問に思つていることがあつたのでそれを聞いてみることにした。

「じゃあ二つほどお願いします。一つは、僕のクラスはどうなるんでしょうか？後もう一つはこつて寮生活って聞いたんですけど……どこにその寮があつてどの部屋に入ればいいんでしょうか？というか今日から使うことは可能なんでしょうか？」

「クラスについては明日職員室に来てもらつてその時にあなたの担任の先生に説明してもらいます。寮の部屋についてはA〜F連ありますがその中のC連の215号室に行つてください。その部屋はすでにあなたの部屋とされています。これがその部屋のルームキーです。なくさないでくださいね？場所については校門を出て、周りを見渡せば6つ寮という感じの建物が並んでいるのですぐに分かると思います」

「分かりました。ご説明ありがとうございます。では失礼します」

今の説明で困ることはとりあえずなさそうだったので、カードキーを受け取り座っていた席から立ち上がり学園長に一礼してそのまま学園長室を後にした……

とりあえず校門を抜けて辺りを見渡すと、明らかに寮という感じのやつが5つほど並んでいるのを見つけたのでそちらを目指して歩き出す。

寮の入口に『C』と大きく書かれた看板がかかっていたのでそこに入った。

そして階段を上り最後の段を上り切り『215』と書かれた自分の部屋を見つける。

しっかりと横にあるプレートに『楠木哲也』と書かれているので間違いないだろう。

俺は鍵を開けるためカードキーを通しロックを解除して、ドアノブに手をかけ、そして押す。その瞬間……

「てーつちゃん」

ととてもとてもかわいらしい学園長が俺の部屋（と思われるが少し心配になってきた）のベットに座りながら俺の名前をしかもあだ名で呼んできたのだった……



### 第三話 学園長（後書き）

駄文で申し訳ない……

感想・評価して頂けたらうれしいです。

#### 第四話 部屋での会談（前書き）

開いてくださりありがとうございます。

新たにお気に入り登録してくださった方、ありがとうございます。

学園日間ランキングで五位にランクイン！！皆さんに感謝感謝です。

誤字脱字あったら報告お願いします。

## 第四話 部屋での会談

ドアノブを引いてドアを開けたその時……

「てーっちゃん」

とベットに座りながら言ってきた学園長に少し困惑する。俺は学園長の方へ歩み寄りながら、疑問をぶつける。

「学園長どうしたんですか？なんでここにいるんですか？てかどうやって俺より早くここに来たんですか？？」

どうやら俺は相当テンパっているようだ。そんな俺の状態を気にすることもなく学園長はマイペースに、その疑問に答える。

「どうしてって言われたら哲ちゃんに会いたかったから。なんでって言われたら哲ちゃんに会いたかったから。どうやってって言われたら哲ちゃんに会いたかったから。それと学園の中以外の時は私のことは舞って名前で呼んで？」

それは疑問に答えているのだろうか？と思うような答えになってない答えを返し、さらには自分のことを名前で呼んで発言……これでもいいのか学園長……！

とりあえず俺は今の答えの意味のわからなさに心の中だけでなく、言葉としてつつこめるだけつつこむ。

「いやいやいや。どれ一つとして答えになってないですよ！特に最後の質問に対しては……！しかもなんで学園長が俺に会いたくなるんですか！？てかなんで学園長のことを名前で呼ばなければならんですか！？学園長はどの生徒に対してもそんなことを要求するんですか……！？」

なんだかつつこみ疲れて倒れてしまいそうだ……しかしそんな俺のものすごい勢いのつつこみに対しても学園長のマイペース加減は崩れることはなかった。いや、むしろ悪化してきて、

「他の生徒にはそんなことさせないよ。哲ちゃんだけ、だよ。だから名前で呼んで？」

と上目遣いで俺のことを見ながらおねだり。

こういうかわいらしい容姿をして華奢な人の上目遣いはどうしても邪険には扱えない存在感というか破壊力が存在する。それは俺にも効果が抜群に発揮されるようだった。ちなみに言っておくが俺は口りのコンではない!……はず。

「分かりましたよ……舞さん」

そう呼んだ瞬間学園長・舞さんはしてやったりというような笑顔をこちらに向けてきた。

きつとこの人は自分の容姿を誰よりも理解しているのだろう。そしてその利用方法も。今それを確信した。

「呼び捨てはさすがに無理があつたか……じゃ改めて、ここに来た理由は聞きたいことと、伝え忘れたことがあつたからなの」  
最初にボソツと言った言葉は聞こえなかつたことにした。

「聞きたいことですか?」

なんだろうと思う。仮にも学園長なわけだから、少しばかりは俺の個人の情報を知っておきたいということだろうか?口調もさつきまでとはうって変わったように丁寧なものとなつているところをみると、興味本意で聞く内容ではないのだろう。

冷静に舞さんが聞きたいこと考えてみるが、分からない。とりあえず俺は「別にいいですよ」と質問を促す。

「うん。じゃあ単刀直入に聞くけど、哲ちゃんって火神家の一人なの?」

その言葉を聞いた瞬間、俺の表情は凍りついてしまつていたと思う。なぜ知つている?どうして?と頭のなかでは疑問が飛び交つている。口にした訳じゃないが顔に出ってしまったのだろう。付け足すように舞さんは言つてきた。

「これは哲ちゃんが渡してくれた手紙の一文に書いてあつたことなの」

「えっ、ってことは……」

「そうよ。これは香織の推測、だつただけけどその様子を見ると推

測は正しかったみたいね。なんでも、哲ちゃんが魔法を使うときの魔力の波動が現火神家主の魔力の波動とほぼ一緒だったんだって。それにそのキレイな赤い髪。他にもいくつか理由が書いてあったけど、言う必要は無さそうね」

俺は舞さんから伝えられなかった言葉に相当な動揺を強いられた。

でも、その言葉を飲み込むことができるんだんと姉さんのやさしさを感じ取ることができた。ほとんど確信していただろうに、その事に関して一度も聞いてこなかったやさしさを。

俺は頭の中で整理がついたので、

「そうです。僕は火神家の一人です。正確には一人でした。もう僕は火神家の人間ではありません。それとできたらこの事は内密にお願いしたいんですけど……」

舞さんを信用して正直にそして正確に俺のことについて簡潔に伝えた。口止めをするのも忘れずに。

「詳しいことは……聞かないほうがよさそうね。この件については語らないことを約束します」

俺は舞さんの学園長としての器の大きさに感謝の示しとして「ありがとうございます」とお礼を述べる。

「お礼なんていいのよ。でも困ったわね……この学園ってその火神家の姉妹がいるのよ……」

「えっ、マジですか……」

一体今日何回驚けばいいのだろうか。もう正直疲れてしまったと、ついそんなことを考えてしまう。

「ええ、だからもしかしたらすぐにはれてしまつかもしれないわ……」

別に舞さんが悪いわけではないのに、力になれなくてごめんなさいとでも言うようにすまなそうに言ってきた。

「それはこっちでなんとかするので心配しないでください。それで伝え忘れたことって何ですか？」

俺は今この話を続けてもどちらにとってもあまり良いことにはなら



ないと思い、これでこの話はおしまいと言つようにうち切り、次の話題へと促す。その俺の意志を感じ取つたように舞さんは俺の疑問に答えてくれる。

「あ、その事なんだけどこの学園の第二部の入学式の日程が急に変わっちゃって明日になったのよ。当たり前だけどこの学園の制服持つてないでしょ？だから明日までに制服を用意するから、学園に来たら職員室に行く前にまず学園長室に来て頂戴」

「……はい、分かりました」

なんか姉さんといい、舞さんといい、なんで重要なことを伝えるのがこんなに急になるのだろうか。

と内心呆れながらも頷く。

「じゃ、伝えることも伝えたしもう暗くなってきたから今日はもう帰るね」

『今日は』の所が妙に強調されていたが気にしないでおう。

そう言った後、舞さんは「哲ちゃんおやすみ。また明日ねー」と言い残し部屋を出た。

廊下からスキップのような足音が聞こえた時は思わず顔がにやけてしまった。

舞さんが部屋から出た後、俺はシャワーを浴びてから明日の準備（ほとんどすることはなかったが）をしてベットに入り横になった。

そしてさっきの会話の中で出た火神家の姉妹について頭の中で思考を巡らせる。

（舞さんに迷惑をかけるわけにはいかないからああは言つたけど、実際ノープランだから……。もし気付かれたらどうしようか……。もし火神家に戻ってきてきてなんて言われたら、俺は……）

俺は長旅で少なからず疲れていたようで思考の途中でいつの間にか瞼の重さに負けて目を閉じてしまい、夢の中へと堕ちていくのだ……



#### 第四話 部屋での会談（後書き）

部活との連立が厳しいために更新速度が少し落ちる事があると思います。

出来る限り1日に1話を更新したいと思いますが、少し不定期になりそうです。

1話完成ごとにすぐ更新するつもりなので、どんなに遅くても3日に1話は更新する予定ですが……本当に申し訳ないと思っています。

感想・評価して頂けると嬉しいです。

## 第五話 学園生活の始まり（前書き）

開いてくださりありがとうございます。

新たにお気に入り登録してくださった方、ありがとうございます。

誤字脱字あったら報告お願いします。

## 第五話 学園生活の始まり

俺はまだ日が昇っていないほど朝早くに目を覚ました。

これは入学式前という緊張のせいではなく、毎朝行っている鍛練をするためである。まあ、緊張してないわけではないが。

俺はベットから身体を起こして洗面所で顔を洗い、動きやすい格好をしてカードキーを忘れずに持ってから寮を出た。

鍛練をするにも場所を見つけるのが先決。

あまり見られたいものでもないので一応人気の無さそうなところを探そうと思うが、考えてみればここは今まで修行を行ってきた森の中と違いそんな場所を見つけるのは困難なことだろう。

まだ日も昇ってきていない時間だから人に見られる可能性は低い。そう思い身体をおもいつきり動かすのに支障がない広場を探すことにした。

俺はとりあえず案内板のようなものからその場所を見つけることにした。適当に探して見つけたはいいが迷って帰れなくなりましたなんて笑えないから。

案内板を探すこと数分、無事見つけることができた。『リンデイル広場』と書かれた場所がここから一番近いのでそこに向かうことにした。

そしてリンデイル広場に着いた俺は早速鍛練を始めた……

-----

キレイな赤い髪をした少年。

その少年がリンデイル広場の中心で構えをとっていた。

面白そうなものが見れそうね……早起きもしてみるものだわ……

そして少年は静から動へと移り変わり疾風のように動き出した。

力強そうな拳を振るい、鞭のようにしなやかな蹴りを放つ。

その姿はまるで演武の見本と言ってもいいくらい洗練されたものであった。

その少年の姿について見入ってしまうくらいに。

ここからでは、はっきりとは判断が出来ないがカッコいい顔をしているようにも見える。

あんな少年はこの学園では見たことがない。

いたら確実に見つけることが出来ている。

私があんなに面白そうな存在を見つけれないはずがない。

転校生といったところだろうか？

もし転校生なら第二部の入学式前ということ考えると、一年生の可能性が高いだろう。

いろいろと思考にふけていたせいか、いんべい隠蔽魔法を使っていた油断だろうか、

私はその少年がいつの間にか演武を止めてこちらに視線を向けていることに、

気づくのが少し遅れてしまった。

しかし油断していたとはいえ、気配をほとんど消していたのに……ホントに面白い存在！！

とりあえず私は近いうちにこの少年についていろいろと調べていこうと心に決めて、

その場を静かに離れていった……

.....

俺は鍛錬をしてる最中や戦闘を行うときは妙に感覚が冴えわたるよ  
うで、わずかな気配でも感じ取ることができる。

それを感じ取ることができたのでそちらに視線を向けていると数秒  
後またすぐに気配は消えた。

一体なんだったのだろうか？もしかしたら気のせいかもしれないが  
.....

気にしてもしょうがないと割りきり鍛錬を続けた。

あれから30分ほど動いた後、今日の鍛錬を終わりにした。さすがに汗をかいた格好のまま行くほど神経は図太くない。それに自分が汗臭いまま人と会うのは嫌である。というより相手に嫌われるだろうと思われることは極力したくはない。嫌われて追い出されるのはもうこりこりなのだ……  
そんなわけで俺は寮に戻りシャワーを浴び、着替えてから学園へと向かった。

学園の玄関から入りまずは学園長室に向かう。

そしてコンコンとノックをして中から舞さんの返事を聞き、「失礼します」と声をかけて入室する。

舞さんは正面にあるちよつと大きめ（舞さんにとって）の仕事机に座って資料を眺めていた。

俺は舞さんと仕事机越しに向かい合うところまで歩み寄ってから声をかける。

「学園長」

資料の確認に集中していて俺の声に気づかないようで顔を上げない。もう一度声をかけてみる。

「あのー、学園長？」

さすがは学園長といったところだろうか。俺の声に反応しないほど集中している。でもそれでは困るので再度声をかける。

「学園長！」

さっきよりもちよつと大きめの声をかけたのにも関わらず反応がない。ここまで来ると狙っているとしたか思えなくなってくる。もしかして……

「あの、舞さん？」

「なに？」

予想は当たっていたらしく、名前を呼んでようやく顔を上げる。

しかし、その顔は頬をふくらましてちよつと不貞腐れているようだ



った。

そんな子供っぽいしぐさ(そんなことしなくても普通に子供っぽい見えるが)に俺はつい苦笑い。

それが気に入らなかつたのか舞さんはますます頬をふくらまして、「哲ちゃんひどいよ……昨日の夜では普通に名前で呼んでくれたのに、今日になってまた学園長つてよそよそしく呼ぶなんて……」

「いや、だって昨日学園以外では名前で呼んでつて言つてたじゃないですか。だから学園では普通に学園長つて呼ぶと思つて」  
なぜこんなところで舞さんは怒つているのだろうか？

「そう言えばそうだっけ？ごめんなさい。じゃあ、私と二人きりの時にも名前で呼んでね！」

「はい……分かりました。それで制服は？」

ここで断るとまたあの上目遣いを使つてくることだろう。俺は素直に了承し、渡されるはずの制服について質問した。

「制服ね……はい、どうぞ」

そう言つて仕事机の引き出しの中から袋に包まれた状態の真新しい制服を取り出して俺に渡してくる。

「ありがとうございます」

俺はそれを受け取り、お礼の言葉を述べる。

「いいのよ。とりあえず早く着替えなさい」

「はい、つてここで着替えるんですか？」

流れで返事をしてしまつたが、ここで着替えるのは抵抗があつた。

「ええ、そうよ」

しかし俺の疑問に当たり前でしょうとでも言うように答える。

舞さんの答え方になんだか抵抗している自分が馬鹿らしくなつてきたので、ありがたく？ここで着替えることにした。

俺は今制服に身を包み急いで入学式の会場となる第一体育館へと向かつている。ちなみに先に職員室に行つてクラスだけは聞いておい

た。

急いでいるのは俺の着替えている途中の姿を見て、いきなり舞さんが暴走してしまい、それを止めるのに時間がかかったせいである。

（あまり思い出したいものではないので省略）

そしてようやく体育館に着いた頃には、すでに大半の生徒が座っていた。

周りの様子を見てみると座る場所は自由なようで、友達同士で座っている者がいれば、一匹狼とでも言うように独りで座っている者がいる。騒いでいる者がいれば、静かに待っている者がいる。

俺はそんな中空いている席に一人で座って入学式が始まるのを待っていた。

時間が少し経ち、まずは渋い男の教頭が開会宣言をして入学式は始まった。

特に変わったこともなく進行していく。

そして学園長の挨拶、すなわち舞さんの出番である。

ステージ上でちっちゃい体を使って身ぶり手振り話す姿は微笑ましく、生徒たちの緊張を解くものであった。

次にステージが上がってきたのは学年首席の女の子。背はそんなに高くないが胸は身長に合ったもので雰囲気は大人っぽく、髪は赤色で肩に掛かるか掛からないくらいのショートカット。顔立ちは整っていて瞳に力強さを感じたのが印象的だった……

その女の子が形式的な言葉で読んでいく姿は、人前に立つのに慣れているようで少しだが威厳さえ感じてしまうものだった。

首席の挨拶が終わり、再び渋い男の教頭が閉会宣言をして入学式は終えた……

そして渋い男の教頭が全体に向けて連絡を伝えてきた。

「これから新入生は自分の所属するクラスに行ってもらいます。クラスの全員が揃い次第担任の紹介と明日以降の予定、連絡をその担任からしてもらいます。それが終わったら解散とします。では各自

自分のクラスに移動してください」

教頭からの連絡を終えた後、俺はとりあえずクラスに向かって足を運ぶのだった。

## 第五話 学園生活の始まり（後書き）

最近、自分の文才の無さをおもいしっています。

しかも内容がはちゃめちゃになっていくような……

感想・評価して頂けたら嬉しいです。

## 第六話 男友達（前書き）

聞いてくださりありがとうございます。

お気に入り登録件数50突破！思わず叫びたくなりました。

誤字脱字あったら報告お願いします。

## 第六話 男友達

入学式が終わり渋い男の教頭が全体に向けて連絡を伝える。

「これから新入生は自分の所属するクラスに行ってもらいます。クラスの全員が揃い次第担任の紹介と明日以降の予定、連絡をその担任からしてもらいます。それが終わったら解散とします。では各自自分のクラスに移動してください」

教頭からの連絡を終えた後、この体育館にいた生徒がほぼ一斉に立ち上がり移動を開始する。

こういう人込みはそんなに好きではなく、むしろ苦手だ。正確には慣れていないという方が正しいかもしれない。そんなわけで教室に着くまでで妙に疲れてしまった……

教室に着いた後、前に貼つてある座席表で自分の席を確認して席に向かう。

席に向かっていているだけなのに教室内の生徒から視線（しかも妙に多い）を感じた。そういえば教室に向かっていている時にも結構な視線を感じたつけ。

その視線をできるだけ意識しないようにして自分の席につき担任が来るまで寝ようと思っただが、その考えはすぐに断ち切られる。

「お前って別の学園からの転校生か？」

と俺の前の席に座っている男子生徒がこちらに体を向けて話しかけてきたからだ。

「えっと……」

「ああ、わるい。俺は晒科利幸たけしかりゆきってんだ。友達はみんな『トシ』って呼ぶからできたらそう呼んでくれ。よろしくな」

男子生徒 - トシは戸惑っている俺に自己紹介をして手を出してきた。

一瞬彼の意図が分からなかったが、すぐに気付いてその手を握って俺も自己紹介をする。

「俺は楠木哲也。呼び方はなんでも構わないよ。こちらこそよろしく」

「おう。で、さっきの質問に戻るんだけど哲也って転校生なのか？」

「正確には違うかもだけど、そんな感じかな」

「ん？どういうことだ？」

俺はこの疑問に答えるかどうか迷う。

きつと俺みたいに15歳まで学園に通ってなくて、しかも第二部からの入学なんて普通はあり得ない。知られば一種の異端児的な存在と受け取る人も出てくるだろう。

「答えづらいなら無理して言わなくていいぞ」

考えているうちに顔に出ていたのかトシはそう言ってきた。

俺はその言葉にありがたく乗せてもらうことにした。

「悪いね。ちよつといろいろとあつてさ。話せるときが来たらそのとき話す」

「わかつたぜ」

気にならない筈がないのにあつさり引き下がってくれたトシに感謝したいと思つた。

「ちよつと聞きたいんだけどさ、さっきからなんだけこの視線の多さは一体何なの？」

さつきから気になつていた視線について聞いてみた。

「普通に考えれば分かると思つんだが……」

がなんともムカつく答えが返ってきた。

「まるで俺が普通じゃないみたいない方だな」

俺は少し怒つたような雰囲気を作りながら言つた。するとトシは焦つたように、

「勘違いをしないでくれ！そういう意味じゃないから！」  
と言つてきた。

「じゃあどういう意味だ？しっかりと説明してくれ」

俺は目が笑つてない笑顔を作つて聞いた。俺の顔を見てまだ焦りが抜けてないがトシは説明を始める。

「えつとだな……哲也つて容姿いいじゃん」

自分ではよく分からないが……

「それで？」

「それに転校生だろ？」

だから何なのだろうか……

「そうだけど、それが？」

俺がそう言つたとトシはなぜ分からないとでも言いたげな呆れた顔で、

「まだ分からないのか……」

と言ってきた。俺は真面目に分からないのだが……

「あのさ、普通に考えたらお前みたいに普通にかつこいい転校生がいたら普通は気になるだろ？」

無駄に普通を強調してきた。言いたいことはだいたい納得できたんだが、

「確かにそうかもだけど……容姿だったらトシの方が良くないか？俺がそう言つようにトシは見る限り相当かつこいいと思う。」

茶色の短髪を所々髪を立たせていて、目は茶色っぽい黒で顔立ちがよく整っていると思う。身長は俺と同じくらいで170前後、体型は細くスラツとしていて脚は長い。そんなトシなのだが、

「やっぱりお前は自分の容姿がどれ程良いか理解してなかったか……」

……  
そんなことを言ってきた。

いやいや、俺の容姿なんて普通だろう。そう言おうと思ったのだが、担任の先生が来たので会話は自然とそこで途切れてしまった。

先生は「静かにしろ」と言いながら俺らの前に来ると、なんともだるそうに自己紹介を始める。

「このクラスの担任になった岡嶋透おかしまとおるだ。嫌いなことはめんどくさいこと。よろしく。明日についての連絡だが新入生の歓迎会があるから、今日と同じ時刻、場所に集合しろ。ただ、今日と違ってクラス

ごとで座ってもらうから間違えるなよ。持ち物は特に何も要らん。」



以上だになにか質問があるやつは……いないな。よし、解散していいぞ」  
必要なことだけ述べた担任は解散の言葉と同時に速攻で教室から出た。  
ホントにめんどくさいことが嫌な人なんだな……何であの人教師になったのだろうか？そんなことをつい考えてしまった。

「明日どうする？どうせなら一緒に行こうぜ！」

トシは担任の連絡が終わったあと、明日のことについてすぐ俺に聞いてきた。

「いいよ、一緒にいこう」

俺は断る理由は何もないので頷く。

「待ち合わせは校門のところでもいいか？」

「オーケー。それでいいよ。じゃ、また明日校門で」

「おう、また明日な」

そう返事をもらえる友達が早速できたことを嬉しく思った。こんな俺にすぐに話しかけてくれたトシのフレンドリーさに感謝して、俺は教室を出た。

## 第六話 男友達（後書き）

遅くなったわりに短いという……しかもどう見ても駄文……

感想・評価して頂けたら嬉しいです。

## 第七話 再会（前書き）

開いてくださりありがとうございます。

10000pv突破！読んでくださっている皆さん、本当にありがとうございます。

誤字脱字あったら報告お願いします。

## 第七話 再会

朝。

今日も鍛練のために早くに目を覚ます。

いくら毎日やっているとはいえ誰しも眠い時くらいはある。今日はそんな日だったのでとりあえず洗面所で顔を洗う。

冷たい水は俺の意識をほどよく覚醒させた。

準備していたタオルで顔を拭き、着替えて部屋から出てリンディル広場へと向かった。

俺は今リンディル広場に向かっているだが、後ろから気配を感じたので足を止めた。

俺はこの気配に驚きと疑問を持った。驚きはこんな早朝なのに起きている生徒がいたこと。疑問はまるで自分に気付けとでも言うように気配を発しているのにあっちから出向いてこないことだ。

俺はとりあえず気配を感じる後ろに振り返ってみた。

そこには力強い瞳をしたショットカットの赤髪の美少女 入学式の時に挨拶をしていた学年主席がそこに立っていた。しかも振り向いた俺の顔を見て少しうれしそうな顔をしている。

本日二度目のしかも連続の驚きでした。

あちらからは声をかけて来なさそうだったので、俺から話しかけてみた。

「えーと、おはようございます。学年主席さんは朝は早いですね」

「……………」

そう言ったら主席さんは沈黙して（もともとだが）少し複雑そうな顔をした。

「俺ちよつと用事があるんで。さよなら！」

俺はこの沈黙の気まずさに耐えることが出来なくなったのでそう言っただけで右を向いてこの場を去ろうとした。

「ちよつと!」

しかし主席さんが口を開いて俺を呼びとめる。仕方ないのでもう一度回れ右をして振り向いた。

「気付かないの?」

「主席さんでしょ」

俺はそんなの当たり前じゃんとはばかりに答えた。がその答えに主席さんは不服だったようで、

「違うわよ!! ホントに分からないの!?!」

そう言われましても……主席さんと言うことは違ったみたいだし……もしかして自分が美少女と言うことか? そのルックスを褒めてほしいと。違うと思うけどおもしろそ、ではなくて少しの可能性にかけてみて聞いてみた。

「あんたが可愛いということか? それなら見れば分かるぞ」

そう言われた主席さんはだんだんと顔が赤くなっていく。そして顔を真っ赤にした状態で、

「そう言うことを聞いてるんじゃない!! ふざけるのもいい加減にしてよ、哲也」

と言ってきた。俺は不思議に思った。

「あれ? なんで俺の名前を知っているんだ? 名乗った覚えもないしあんたみたいな美少女と知り合いな覚えもないぞ?」

そう、なんで主席さんは俺の名前を知っているんだろうか。

「私はあなたのことをよく知っているのよ」

俺はその答えにひとつの考えが脳裏に浮かぶ。

「もしかして……」

そう言った時主席さんは期待をする視線で俺を見てきた。俺はその期待に、

「ストーリーカーなのか!?!」

答えられそうもない答えを返した。でもゼロじゃないぞ。昨日もこの時間で鍛錬してたら視線を感じたわけだし……まあ当たっている確率は、ほぼゼロだろうけどね。

「そんなわけないでしょ!!」

やはり違っていたらしい。主席さんは一回ため息をついてからボソボソと何かを言いだした。

「ホントは哲也から気付いてほしかったんだけどな……まあ髪型もロングからショートに変えたわけだし、しかも哲也だし仕方ないか……」

「ボソボソと何言ってるんだ。なんか怖いぞ?」

いや冗談抜きでこれがなかなか怖いんだよ。

主席さんは俺の言葉を軽く無視してさつきよりも大きいため息をついてから言ってきた。

「私はあなたの双子の妹の……哲也の妹の火神美佳<sup>かがみか</sup>よ」

ん?今なんとおっしゃった?俺に妹なんていたっけ?名前は火神美佳<sup>かがみか</sup>って言ってたけど……火神美佳……かがみか……かがみ……火神!?

今言われたことが衝撃的すぎて驚きを隠せない。てか実際に驚きすぎて混乱してたし。

それが収まると不思議と、美佳のこと 昔のことを思い出してきた。

確かに言われてみるとその顔には面影があるような気がしてくる。

「本当に美佳なのか?」

いちよう確認のために聞いてみた。

「そうだよ。まさか最後まで気付かないとはね……私は一目見て気付いたっていうのに……さすがは哲也だね」

主席さん 美佳は俺の言葉に頷いてから、俺のことを馬鹿にするように褒めてきた。てか褒めてないね。

「でも一目でよく俺って分かったな」

「そりゃ分るよ。哲也全然変わってないんだもん」

「そうなのか……」

俺は軽く苦笑いをして、美佳は俺に向かって微笑んできた。

「それにしても美佳ってどんな髪型でも可愛いんだな」

「えっ？」

俺が唐突にそう言うと美佳の顔はさっきと同じように赤くなっている。

「だって昔はロングヘアだったのに今はショートカットじゃん。ロングも可愛いと思ってたけど、ショートもなんというかこうやって見ると似合ってるな」

俺は思ったことを口にはしているが、こんな言葉が違和感なくヒョイヒョイ出てくる自分はいろいろとまずいと思った。案の定美佳は、

「あ、ありがとう……」

と顔を真っ赤にして言っつうつ向いてしまった。

沈黙した気まずい空気（逃げ出したかった……）が続いたが、ようやく落ち着いた美佳は俺に質問してきた。

「なんで出ていったの？」

恐らく美佳が一番聞きたかったことだろう。

「……自分の意志だ」

美佳には悪いが俺は嘘をつくことにした。

「そんなの嘘に決まってる！！」

が瞬間的に否定されてしまった。

「どこに哲也が行ったか父さんに聞いても『勝手に出ていった』とか『あいつの意志だ』とか言ってくるし……でも私はそんなの信じられない！哲也がそんなことするはずがないもの！さあ、本当のことを話して！！」

ここは正直に答えるべきなのだろうか……もう一度考える、悩む、考えて悩む。

「……とうさ、いや……美佳の父さんに出ていくように言われたが、最終的には自分の意志で出ていった……」

そして俺は事実を、起きた出来事が必要な部分だけ言うことにした。

「それって……本当なの？」

俺の言ったことが信じられないのか美佳は困惑しているようだった。

「事実だ」

そんな美佳に構わず俺はきっぱりと答えた。

「そう、なんだ……」

まだ事実を受けきれないようだった。まあこの短時間では無理だろう……

なんだか空気がだんだん悪くなってきたし、聞きたいことがあったのでとりあえず話を変えることにした。

「そういえばさ、なんで俺がこの時間に起きてること知ってたん？」

「えっとね、友達に聞いたの。早朝に赤髪の転校生と思われる男子がリンデイル広場で面白いことしてるってね。それに哲也の顔は入学式に日に見てるし、恐らくそれは哲也かなと思ったの」

「……なるほど」

あんな情報だけでそれが俺って当てるなんて女の勘ってすげえと思っただ。

てかあの時に感じた視線は気のせいじゃなかったのか。

「じゃあ、俺寮戻るわ」

話しているうちに結構時間が経ってしまったので今日は鍛錬をしないことにした。

「また後でね」

「おう、そういえば言い忘れたけど俺が火神家にいたって事誰にも言うなよ」

「姉さんには？」

俺がそう忠告すると美佳はちょっと悲しそうに瞳を向けて聞いてきた。

「もしあっちが俺に気付いたら説明するさ。基本的に言う気はない。だから誰にも言うなよ？」

「でも！？……わかったよ……」

俺が目で訴えかけると美佳はあまり納得はできていないようだったが、渋々と頷いた。

「それじゃ」



「うん」

俺と美佳はお互いに自分の部屋へと戻っていった。

## 第七話 再会（後書き）

なんか書いた後に思ったが展開が速いような気がする。

指摘されたばかりなのに上手くできない自分が悔しいです……

感想・評価して頂けたら嬉しいです。

## 第八話 幼馴染（前書き）

開いてくださりありがとうございます。

誤字脱字あったら報告お願いします。

## 第八話 幼馴染

美佳と別れてから俺は寄り道することなく寮に戻った。時計を見ると待ち合わせにはまだまだ早い時間帯だったので、制服に着替えてからベットに寝転がって時間を潰すことにした。そしてさっきのことを振り返っていく。

約九年ぶりに会った妹 - - 美佳はとても可愛かった

髪型がおもいつきり変わっていてビックリしてしまった

美佳との久しぶりの会話は、なんだか楽しかった気がする

美佳は俺と久しぶりに会って、話してどう思ったのだろうか？

俺が出て行ったあの日からどんなことを思い、何を考えたのだろうか？

あの様子だと心配してくれたのだろうか……

そうだったらちょっと嬉しく思う

だが同時に自分に腹が立つてくる

親に出て行けと言われたといえ、何にも言わず、別れを告げずにどこかへ行ってしまった自分に

迷惑をかけまいと勝手に思い込んだ自分に

姉はどうなのだろうか？

美佳があの様子だと、姉はきつと……ひどそうだ

考えると悪寒が何度も背筋に奔るため、そこで思考は終了した。できることなら姉との再会は心の準備がちゃんと出来てからにしてほしいと思った。

再び時計を見ると時間にはまだ余裕が少しあるが、待たせるよりはいいだろうと思い、寝ころがったことにより少し乱れてしまった服を整えてから学園にむかった。

待ち合わせの場所には、すでにトシが待っていた。

壁に背を預けて腕を組み人を待つ姿は妙に似合っていた。

俺はちよつと早足になってトシに近づくと、俺に気付いたようで軽く手を上げて会釈をする。

「よつ、哲也」

「おはよう、トシ。待たせちゃってごめん」

「そんなに待ってないから、気にするな。別に時間に遅れたわけじゃないんだし」

「うん」

「じゃあ、行くか」

会釈を返して待たせたことを詫びると、トシは社交辞令とばかりにそう返してくれた。

そして集合場所に向かうために、並んで歩き始めた。そこに……

「とうー！」

「ぐはぁっ」

掛け声と共にトシに向かって飛び蹴りをかます一つの人影。

その人影は少女だった。髪は黒色で長さはミディアムと言ったところだろう。顔はまだ幼い感じがする。普通よりはかわいい。プロポーションも発展途中のようだった。

その少女から飛び蹴りをくらったトシは、声を上げて見事にふつとんでうつ伏せに倒れている。あ、腰さすってる……痛かっただろう

……

「何しやがる!!!」

当然のように飛び蹴りをかました少女に向かってトシが吠える。

「あははー。痛かった？」

そんなトシをその少女は笑いながら心配？をする。

「当たり前だ!!!」

「そっかー。ごみんね？」

喰ってかかるトシに全く動じる様子もなく軽く謝る。

「ねえ、トシ。この人は誰なの？」

俺はこの少女についてトシに質問を試してみた。

「ああ、こいつはだな」

「はっねあかり初音朱里。それがうちの名前。こいつとはいちようなぜか幼馴染。よろしくねー、えつとお」

「楠木哲也。よろしくね、初音さん」

「こちらこそ、楠木君」

起き上がりながら説明をしようとしたトシの変わりとはばかりにその

少女 朱里は俺に向かって自己紹介してきたので、俺も自己紹介をした。

「それにしても、見事な飛び蹴りだったね……」

「あ、うち褒められちゃった？うれしいなー」

褒めているというか、軽く呆れています。

「誰も褒めてねえよ!!!アホか!?!てかアホだったな……」

トシと意見があった。しかしつつこみの切れが良い。

「もう一発くらいいいのかな？」

「すいませんでしたもういいません」

面白おかしいコントを見て頬が緩んでしまう。

「そろつと行かない？」

しかしこのままだと結構な長さのコントになりそう気がしたので、俺はそう促した。

「おう、行くか」「そうだね、行こっか」

二人はそれに頷いた。

第一体育館は昨日と同じように綺麗に椅子が並んでいた。

違うのはその椅子の数が前の三倍ということだ。こつやってみると相当の生徒の数だ。

まだ時間は早いので生徒の数はそこまで多くない。

「どこ座る？」

俺は二人に問いかける。

「前の方で良いんじゃないか？あえて二年とか三年とかの所に行く必要もないだろう」

「うちもそれに異論ないよ」

「じゃ、座ろっか」

トシは座っている人の姿を見てそう言い、朱里もそれに同意した。

余談だが、この学園は一・二・三年それぞれ学年によって制服についている胸のバッチの色が違う。

一年が青、二年が赤、三年が白だ。トシはそのバッチを見て判断したということになる。

そうして俺たち前から三列目のかなり前の方の席に三人で並んで座った。

しばらく時間が経って、歓迎会が始まる時間帯になった。

そこで渋い男の教頭の声が第一体育館に響く。

「後数分で歓迎会を始めたいと思います。立っている生徒は静かに

空いている席についてください。繰り返します……」

生徒たちはその声に反応してほとんど席についていく。

「歓迎会ってなににするんだろうね。うち、楽しみでしょーがない」

朱里が喜々とした表情で言い出した。こういう行事は好きなようだ。

「俺が知るか。無駄にテンション高い。静かにしてろ」

それに対して冷たい雰囲気ですし、朱里を黙らせようとする。

「へえ、うちに対してそういう口きくんだ。さっきの出来事を反省できてないようだね。後でどうなることやら」

だが逆効果なようで、言われた本人は気にもせず、トシに対してそう言った。

言われた後に、トシが冷や汗をかいていたが自業自得だと思い込んで無視することにした。

この二人は完璧に上下関係が出来上がっているようだった。

「それでは今から、歓迎会を始めます」

そう結論づいたところで、渋い教頭が歓迎会の開始を告げた。



## 第八話 幼馴染（後書き）

新キャラ続々登場します。（たぶん）

しかし相変わらずの駄文……

ご指摘ございましたらコメントしてくださいとありがたいです。

感想・評価してくださいとうれしいです。

## 第九話 歓迎会（1）（前書き）

開いてくださりありがとうございます。

誤字脱字あったら報告お願いします。

## 第九話 歓迎会（1）

「それでは今から、歓迎会を始めます」

まだ少しざわついていているが、それに構わず渋い教頭が歓迎会の開始を告げた。

「伝えるのが遅れましたが、この歓迎会は生徒会のみなさんに司会、進行をやってもらいますのでそこら辺をご了承ください。では生徒会のみなさんお願いします」

渋い教頭はそう言うってから生徒会の一人と司会を交代した。

「みなさん、おはようございます。この歓迎会の司会、進行を務めさせていただきます、生徒会書記の夏目涼華なつめすずかです。よろしくお願いします」

生徒会の書記 夏目涼華は全校に向けて挨拶をしてぺこりと頭を下げた。

美しい仕草にここにいる男子の多くは目を奪われることだろう。

実際に視線が釘付けになっている生徒も少なくない。

「人気高そうだな」

俺は小声で隣に座っているトシに話しかけた。

「ん？ああ、あの人のことか？高そうじゃなくて、ホントに高いぜ」それはそうだろうと思う。

挨拶をしたときの声はとても凜としていて、顔もそれに合っていて美少女というよりは、美人という表現の方が相応しく思う。髪は藍色のセミロング。目付きはちょっとときつく、無表情で無言で見つめられたら少し怖いかもしれない……霧囲気的にはさしずめクールビューティーといった感じた。

「楠木君ってああいう人が好みなの？」

隣に座っている朱里から疑問が飛んでくる。

ちなみに今の俺らの座っている順番は右から朱里、俺、トシの順である。

俺が真ん中の理由は簡単でお互いがお互いに隣に座りたくないからだそうだ。

「うーん……まあ、幼い感じの人よりは、ああいった大人びた人の方がいいと思ってるかな」

「確かにな。こいつみたいに子供の雰囲気丸出しのうるさくてやかましい奴よりは断然ああいう人の方がいいよな」

俺がそう答えると、トシは朱里を指さしながら俺に同調した。

「トシって反省って言葉知らないんだねー。うちが後でたつぷり反省させてあげるからね。感謝しなさいよ」

やはりというかなんというか、朱里はトシに背後にオーラを漂わせながら睨みつけた。

「あれね、もしかして朱里ちゃんはその書記の人の容姿が羨ましいのかな？」

だが今回のトシはさつきとは違い、そのオーラに負けずに朱里に視線（主に胸）を向けながら言い返す。

トシが言った言葉は朱里にダメージを与えたようで、朱里は顔を下に向けた。

「うう、気にしていることを……後でぶっ殺す」

「え、なんだって？」

隣にいた俺は朱里の言った言葉が最後まで聞こえたが、トシには聞こえなかったらしい。

歓迎会が終わった後、恐ろしいことになりそうだ……

「なんでもない、ない。ほら、真面目にしようよ」

「お前がそれを言うかよ……」

顔を上げてから言った朱里の言葉に憎まれ口をたたくトシ。

俺はその姿に軽く苦笑しながら前を向いて話を聞く体制を整える。

「……それでは、次に我が学園の生徒会長に挨拶をしてもらいましょう。ではお願いします」

「はい」

第一体育館に、一人の女の子の声が響く。

その声を発した生徒会長がステージの上へと移動していく。男女問わずその動きに釣られて視線を動かしている。

「優姉……」

俺は生徒会長を見ながら、隣にいる二人にも気付かれないような声ですらう呟いていた。

間違いないあそこに立っている生徒会長は優姉だろう。

九年前とほとんど変わらない赤い長い髪をひとつにまとめたポニール。きちんとした立ち姿は体型の良さを際立たせる。顔はもちろん美少女の類。それと美佳からの情報からして間違えないだろう。

「みなさん、おはようございます。当学園の生徒会長の火神優奈かがみゆなです。第一部から第二部に上がってきた生徒のみなさん、それと例年より多い他校から来た生徒のみなさん、試験の合格と第二部の入学おめでとうございます」

それにしても相変わらず綺麗な声をしているなと思う。余談だが優姉は歌がめっちゃめっちゃ上手かった。

「私たち第二部の在校生は、皆さんがこの学園に来ることを、とても楽しみにしていました。生徒会長の私も当然その中の一人です」  
「どンドンと台詞を述べていく優姉は生徒会長にふさわしい堂々としたものだった。」

「私たち在校生よりも、学園長が特に新入生を楽しみにしていて、前日の時にすれ違った時のあの姿は、まるで子供のようでした」

そのまんまじゃん、と思っってしまった俺には罪ではないはずである。優姉の言葉に笑っている生徒も少なくないし。

「そんなわけで私たち第二部の生徒、先生はあなたたちを歓迎します。短いですがこれで私からの挨拶を終わりにしたいと思います」  
「そう言っつて、ペこりとお辞儀する。顔を上げる瞬間、俺に向かってニヤリと笑みを見せてきたことは、気のせいであってほしい……  
そして優姉はそのままステージから下りていった。」

「会長、ありがとうございます。つづいて、新入生と在校生の親睦を深めるためのゲームに移りたいと思います。説明は副会長お願

いします」

副会長と思われる男子は、すつと立ちあがる。

「生徒会副会長の野田信二だ。のだしんじよろしく。では早速今から行うゲームの説明を始めたいと思う。ルールはかなりシンプルだ。まずはじめに各学年最低一人ずつ入ったグループを作る。ただし人数は最高でも十人とする。そしてグループが出来たらこの学園の様々なところに貼つてある紙に書かれた課題や問題を探し、それをクリアしてもらう。説明は以上だ。ちなみにクリアした数が一番多かったグループには会長からプレゼントがある。ほしければ頑張ることだな。それではグループを作り始める。できたグループから紙を探し始めても構わない」

その言葉がきつかけとなり、ゲームが始まった……

## 第九話 歓迎会（1）（後書き）

感想・評価して頂けたら嬉しいです。

## 第十話 歓迎会(2) (前書き)

開いてくださりありがとうございます。

誤字脱字あったら報告お願いします。



## 第十話 歓迎会(2)

「グループを作り始める。できたグループから紙を探し始めてもかまわない」

副会長のその言葉がきっかけでここにいる生徒が動き始める。

「俺らも動くか」

俺は立ちあがってから二人を呼びかける。

「そうだな、二・三年捕まえて早く紙を探すか」

トシはそう言っただけで動き出そうとした。しかし朱里が「ねえねえ」と面白いことでも思いついたようで、動き出そうとした所を弾んだ声で引きとめて提案してきた。

「このゲームを利用してこの三人で勝負しない？」

「は？」「どういうこと？」

トシは意味が分からないという様子だ。俺もよく意味が分からないがとりあえず朱里の提案の意図を聞いた。

「どういふことって言われてもそのままだよ。この三人で勝負するんだよ。そっちの方がもっと面白くなりそうじゃん。勝負するならやっぱり罰ゲームが必要よね……一位の人が他の二人に何か命令を下せるって言うのはどう？」

と言っただけでトシに挑発するような目を向ける。

「…おもしろえ。いいぜ、やるうぜ」

挑発に簡単に乗っかってしまつたトシの図が完成……。どんだけ単純なんだから。

とはいっても俺もこういう勝負事は嫌いじゃないから頷いて同意を示す。

「クリアの数が多い人が勝ちでいいよね？」

「いいぜ」「いいよ」

俺とトシは再び頷いて、みんながそれぞれの方向に動き出した……

(さて、どうしようか……)

俺は心の中で呟く。この学園の先輩との交友関係が少なからずあるあの2人は、俺よりはやりやすいことだろう。正直あんまり知らない人に声をかけるのは得意ではない。ということ、歩きまわって声をかけられるのを待つことに。と決定した瞬間に、後ろから声がかかる。

「哲也じゃない。一人なの？」

「美佳か、それと……」

振り返ると、そこには美佳と見知らぬ一人の女子生徒がいた。胸を見てみると赤色のバッチを付けていた。

「どうも、はじめまして。美佳の友達の朝瀬川美月あさせがわみずきっていうの。よろしくね。よかつたら私たちとグループ組まない？」

「別にいいですよ」

断る理由もない……わけでもないけど、せっかく誘われたんだからということ朝瀬川さんからの提案に頷いた。

そしてそこにさらなる人影がこちらに来た。

「美佳が男の子と一緒にいるなんて珍しいわね」

「…もしかして彼氏？」

「そういうのじゃないですよ！お姉ちゃんならともかく涼香さんまでそういうこと言わないでください」

一人は生徒会長で、もう一人は生徒会の書記の人だった。てかあんなこと言ってるけど、優姉って俺に気付いてないのか？そうなるにあの意味ありげな視線は何だったのだろうか？

「ともかくってことは私は美佳に対していつでもそういうこと言ってもいいの？」

「よくないに決まってるでしょ！」

「なーんだ、つまんないの」

俺の思考とは関係なく、見事な姉妹での漫才が始まる。この二人は姉妹として仲が良かったから、これがお互いにからかいということ

を分かっている。だから本気で怒ることはないので心配はいらないだろう。

「ホントあなたたち姉妹は仲がいいわね」

漫才中の姉妹に、夏目さんが少し呆れたような感じで、俺の思っていたことを口にする。

「そうかしら」

まんざらでもなくうれしそうにする優姉。

「そういえば生徒会長と書記の方々が、こんなところに話しに来てて大丈夫なんですか？」

俺は優姉に問いかける。

「大丈夫も何も、私たちも参加するのだけど」

「そうなの!？」「そうなんですか!？」

何を言っているのかしら、とでもいうように、小首をかしげながら答える優姉に、驚きを隠せない俺と美佳。てか妹にそういうのって伝えないものなんだ……

「そんなに驚くこと?ちなみに私と涼香がこっちに来たのはあなたたちのグループに混ぜてもらったためよ。入ってもいいかしら？」

姉妹そろって同じグループになってしまつとは、俺は運がないのだろうか……

「構わないですよ」

「会長にそう言われたら拒否するわけにはいかないですね」

「お姉ちゃんの場合、拒否したとしても、結局無理矢理入るんだろうけどね」

俺は素直に頷き、朝瀬川さんは皮肉を言うように答えて、美佳がしようがないとも言いたげな口調でそう言った。

「じゃあよろしくね。これで各学年一人ずつ集まったことだし探しにいきましょうか」

ここにいる全員が優姉の言葉に頷いた。

第一体育館を出て俺らは目的地も決めずに適当に歩く。

これは朝瀬川さんの提案で『真面目に探すのもめんどくさいし、適当に歩いて見つけたものを解けば良くない』という発言によるものだ。なんとも適当な考えだがここにいる人たちはそれに反対するとはなかった。

「紙、ありましたよ」

周りに紙があるか探しながら歩くこと数分、俺は文字が書かれている紙を見つけた。

「え？……あ、ホントだ。言われなきゃ見過ごすところだった……」  
美佳は紙を見つけられてなかったことに少し落ち込んでいる様子だった。

「これは……闇系の隠蔽魔法が掛かっていますね。しかも注意しても気付かないこともあるくらいの強さで。私も言われてやっと気付きましたし、そう落ち込むこともないと思いますよ」

意外でもないけどしつかり心配りができるようで、夏目さんがそう言って美佳を励ました。

「それにしても楠木君、よくこの紙に気付いたね」

興味深そうに朝瀬川さんが言ってきた。

「なんとというか……微量でしたけど魔力を感じたので、そこを視たらありました」

「へえ〜。すごいね」

朝瀬川さんはそう言って面白いものを見るような目線を俺に向けてきた。てか『も』ってなんなんだ？

「そういう朝瀬川さんも紙にちゃんと気付いてたんじゃないですか？」

「いちようね。まあここは一年生の顔を立てるのもいいでしょ。それじゃあ楠木君、問題を確認してみて」

「分かりました」

紙には……

問題その21『この学園の生徒（第二部のみ）の数は何人でしょうか？A - 6 2 3、B - 6 1 1、C - 6 5 2』  
と書いてあった。

俺は書いてあったことをみんなに伝えたと優姉が、

「会長である私にとってこんな問題は答えられて当然！答えはAよ！」

「さすが会長ですね……」

ノリノリで答える優姉に俺は苦笑しながら言った。

この問題を作った人は会長を対象とすることを考えてはいなかったのだろう。

俺らが見つけた問題は、学園のことに関することばっかで、俺らのグループは優姉が全問すべてを正解していった。

知ったのは後日だが、結果はもちろんというかなんというか……

俺らのグループが一位という結果でゲームは終了した。

## 第十話 歓迎会(2) (後書き)

感想・評価して頂けたら嬉しいです。

## 第十一話 興味（前書き）

開いてくださりありがとうございます。

お気に入り登録数100件突破。PV30000、ユニーク5000突破。

うれしくて「ひゃっほー！ー！」と思わず叫んでしまいました。読んでくださる読者様に本当に感謝しています。

誤字脱字があつたら報告お願いします。

## 第十一話 興味

歓迎会が終わって数日後のこと。あれから特に何事もなく、俺はいつも通り今日も早朝から鍛練をしている。

今日の鍛練の内容は、この世界で使われているもう一つの力

『氣』のコントロールを行っている。

『氣』は魔法の力とは関係なく、努力をすれば使えるものと姉さんから聞いた。

その言葉通り魔法の力がそんなに強くない俺でもなんとか使えることができた。

使えるようになるまでの地獄の鍛練は今でも忘れられないが……  
使い方としては身体能力の強化が一般的だ。

魔法使いは当然かもしれないが『魔法』の力ばかりを頼ってしまうために身体能力が低い人が多い。そのためにつくられたのが『氣』だと姉さんが言っていた。

俺は森の中で『氣』の鍛練をずっと行ってきた。そのお陰で自分の力に少しながらも自信がついた。

魔法の力はあるからそこまで成長していない。

ちなみに『氣』の種類は二つある。一つは外氣、すなわち自然の力を利用した『空氣』。もう一つは自分自身の中にある潜在的な『体氣』。

空氣は環境によって異なるが量が膨大で、使いこなすのが難しいかわりに使えたときは自分に大きな力が備わる。体氣は空氣と比べると量をはるかに劣ってしまうが使いやすい。体氣は鍛えれば増えていくらしい。

ちなみに、今俺が行っている鍛練は空氣のコントロールだ。このリンドイル広場は周りにぐるっと木で囲われている所だから、空氣を扱うところとして森ほどではないが、とてもいい環境なのだ。

俺はまず、自分の体全体に『氣』を纏わせることから始める。空氣



は自分の身体能力を上げるだけではなく周りの気配を感じることも優れることが特徴的である。そのおかげとでもいうのだろうか。俺のことは見ているひとつの気配に気付いた。

俺はとつさにそこに向かって短く呪文を唱えて風の下級魔法『ウインド』を放つ。

少し強めの突風が放たれて、そこから気配が漏れだした。

そして俺は体気で足を強化してすぐさまそこに駆けつけた……

私は今日も彼を見にきていた。

今日は何を魅せてくれるのだろうか……

私は彼に期待を寄せつつ、一つ一つの動作を見逃さないように集中する。

当然ながら自分の姿と気配を消す隠蔽魔法を自分にかけて木の上で観察します！

前みたいに気付かれたら面倒だしね。

とはいってもあの時の紙にかけといた隠蔽魔法すら見破られているから、ばれることもあるかもしれないけど……

そうなったときの対処はそのときに考えよう。

自分で言うのもなんだけど私は楽観的に物事を考えます。

ほどなくして彼が何かを始めた。

強烈な、それでいて繊細さを感じる気配が彼の周りに段々と漂っていく。

それは今まで聞いたことがあるだけで実際に見たことがないから確信は持てないけど……

まさか『氣』なのではないだろうか。

あれをあの年で使える人など聞いたことがない。

少なくとも私は知らない。

それに使える人の名前を並べていったら歴史上でもこの世界でトップクラスの者ばかりだ。

私は彼が『氣』を使っていることに対する驚愕と、見たこともない力を使っている恐怖が生まれた。

そしてそれらを上回る彼に対する興味が私を支配していく。

本当におもしろい

私は顔から自然と笑みがこぼれてくる。

これからの日常は彼と一緒にになるわけだし面白くなりそうだ……

しかしそんな思考も私に向かってくる突風に中断させられる。

その風をまともに受けたせいでバランスを崩し、そのまま木の上から落ちてしまった。

痛い……思わず顔をしかめる。

さらに衝撃で自分にかけていた魔法が解けてしまった。

ヤバイと思い、打ってしまった腰を擦りながらもその場を立ち去ろうとしたが、

「朝瀬川さん？」

すぐ目の前に彼は現れた……

そこにいたのはこの前のゲームでグループが一緒だった女子生徒だった。

俺が名前を呼ぶと、おどけるように言ってきた。

「あはは……見つかつちやつたか」

「覗き見なんて感心しませんよ」

俺はそう言っただけで済むが、ごめんね」と謝る気がない謝罪をしてくる朝瀬川さんを見るとあまり意味はないかもしれない。

「確かに私もいけないことしたかもだけど、いきなり魔法を使うなんてひどいんじゃないの？」

「それはっ……いえ、すいませんでした」

言い返したいところだったけど、もつともなことなので素直に謝まることにした。俺の謝罪に「まあ、いいわよ」と言っただけで（いつの間にかあなたが許す立場になったのだろうか……）俺に質問をしてくる。「楠木君がさっきやってたことって、もしかして『氣』の操作なの？」

「そうですよ。見てて分かりませんでしたか？」

「聞いたことはあるけど……見たのは初めてだったから確信できなかったの」

「へ？初めて、ですか？」

俺はおかしいと思う。姉さんから聞いたことからすると、これくらい『氣』の扱いは出来ると思っていた。姉さんとの最初の方の修行で俺がなかなかできなくて泣きごとを言っただけで、姉さんから「これくらいは誰でもできるわよ」と言われてたくらいだ。

つまりは俺がやっていたことは『空氣』の扱いの基礎なのだ。

それを見たことないということは彼女は『氣』を使えないという可能性が高い。

でもこの人ならできて当然なのではないのだろうか……

「そうよ。珍しいものを見せてもらってたわ」

「珍しいですか？俺が聞いた話だと努力すれば使えるらしいですよ。なんか姉さんと言っただけのこととずいぶん違う。

「努力も何も使い方すら知らない人が普通だと思っただけよ。当然私も知らないわ」

「そうなんですか!？」

「え、ええ……」

俺は驚きのあまり少し声が大きくなってしまった。朝瀬川さんは俺がこんなに驚いていることに戸惑っているようだ……

「これってあまり使わない方がいいですかね？」

「ついそんな疑問が浮かんでしまう。」

「使っても問題はないけど、使っているところを見られたら注目的になるでしょうね」

俺はその答えによって今後の力の使い方が大きく変わった。人前で使えるのはきつと内側からなる『体氣』の身体強化だけになるだろう。当然使うのは控える。そしてさっきの朝瀬川さんの様子を見ると『空氣』はもちろん、その応用を使うのはやめた方がいいということが分かった。

「分かりました、あまり使わないようにします。それと俺が『氣』を使えることは、内緒にしておいてください」

「別にいいわよ。その代わり一つお願いがあるんだけどいいかしら？」

「いいですよ。まあ内容によりますけど……」

俺は無難に条件を付けて置く。

「大したことじゃないわよ。ただあなたの鍛錬の様子を毎日見させてほしいの」

「……分かりました。ちゃんと内緒にしておいてくださいね」

ちよつと考えたが他の人に言いふらされるよりはずっといいだろう。それにどつちにしるこの人は絶対見に来ることだろう。

「分かってるわよ。『氣』のことについては黙っておくわよ」

「それだけじゃなくて、ここで鍛錬していることも黙っておいてください。美佳に教えたのも朝瀬川さんでしょ？」

俺はここで朝瀬川さんに釘を刺しておくことにした。

「あれ、知ってたんだ」

「美佳が友達から聞いたって言うてたので。今回の件で朝瀬川さんが教えたということが分かりました」

「あはは……わかったわよ。黙っておく」

「頼みますよ」

「はいはい」

かなりいい加減な返事だが信用することにした。

「それではいったん帰ります。さよなら、朝瀬川さん」

「あ、そうだ。これからあなたのこと哲也君って呼ばしてもらおうから。その代わりに私のことは美月って呼んでいいわよ。同じ仕事を  
する仲間になるわけだし」

「同じ仕事？どういうことですか？」

いきなり言われた意味のわからない発言に少し混乱してしまう。――

体何なのだろうか……

「あれ？まだ会長から聞いてなかったの？」

そして俺はこれから繋げられる言葉に混乱はさらに深まっていくことになる。

「あなたは生徒会の一員になることが決定しているのよ」

## 第十一話 興味（後書き）

感想・評価して頂けたらうれしいです。

## 第十二話 呼び出し（前書き）

開いてくださりありがとうございます。

誤字脱字あったら報告お願いします。



## 第十二話 呼び出し

「あなたは生徒会の一員になることが決定しているのよ」

その言葉に俺は驚き、寮に戻ろうとしていた足を再び朝瀬川さん、改め美月さんに向ける。

「あのー、いつの間に俺が生徒会に入ることになったんですか？」

「会長からのプレゼントよ」

ああ、そういうことか……優姉のあの笑みはこういう意味だったのかもしれない。

でも優姉のことだからこれだけじゃなくて、色々と考えてあつてのあの笑みなのかもしれない。

一体俺に何をさせるつもりなのだろうか……

「哲也くん？」

美月さんから呼び掛けられて自分の思考の渦から抜け出す。

「……すいません。ボーツとしてました」

こんな姿を見せてしまったことが恥ずかしくて顔が少し熱くなってしまう。それを振りきるように俺は先程までの話に戻す。

「会長のプレゼントって歓迎会の時のゲームで一位をとった時の景品のなものですよね？」

「ええ、そうよ」

美月さんは俺の言葉に頷く。てことは美佳も生徒会に入るのだろう。俺は別として美佳の場合はプレゼントなんかなくても入ることになっただろうけど。

「あんな決め方で生徒会に入っても大丈夫なんですか？きっと不満を持つ生徒もいると思いますし……」

「会長が決めたことだしね。文句がある生徒は私たち、というか主に会長がひねり潰しに行くと思うから大丈夫よ」

「はあ……」

物騒な言葉に思わず苦笑いを浮かべてしまう。でもこの言い方だと

やはり文句が出ることは間違いないのだろう。

「確認でしかないんですけど、生徒会に入ることを断ることってできませんよね？」

きつと即答で頷かれると思っていたが答えは予想外にも、

「別に断っても大丈夫よ」

断っても問題なかった。たぶんここで了承してしまったら面倒くさい仕事や出来事に巻き込まれてしまう。正直それは嫌だったからできたら断りたいと思っていたから俺はここで断ろうと思った。

「ただ会長と私も含まれているその仲間を敵に回すことになるだろうけどね」

と満面の笑みで言われなければ。なぜ姉さんといいこの人といい笑顔がこんなにも怖いのだろうか……

「それは怖いですね。元々断る気もない俺には関係ないですけどね」俺は断るという考えをごまかすようにちよつと早口になりながら言った。

「それもそうね。ちゃんとした連絡が後で来ると思うから大丈夫だろうけど、今日の放課後に集まりがあるから忘れずに来なよ」

「はい……」

これで俺は確実に、生徒会という縛りから逃げることができなくなるだろう。

「それじゃ、寮に戻ろうか」

美月さんがそう言っただけで寮に向かって歩きだし、俺も寮へと戻っていた……

そして学校。

俺はいつも結構早めに学校に行く。この時間帯だとあまり人がいない。

あまりいないとは言っても少ないだけで普通に何人か生徒がいる。

そのなかに知り合いが窓の外の景色を眺めていた。俺はそいつに話しかける。

「相変わらず早起きだな、美佳」

相変わらずというのも、あの時の美佳も毎朝早くに起きていたからだ。それに美佳は本当に学園に来るのが早いのだ。俺が来るときにはすでにこうして外を眺めているのだ。

「毎日、朝早くにトレーニングしてる哲也に言われても、ちょっとした皮肉にしか聞こえないわね」

そう皮肉を言うてくるも心なしか嬉しそうな顔をしているのであまり効果はない。しかし何で俺みたいなやつに話しかけられて嬉しそうにするのだろうか？美佳の容姿だったら男には困らないだろうに……

「まさか……お前ってブラコンなのk、ぶはあっ」

「何言ってるのよ！？そんなわけないでしょ！！」

俺は言っている途中で美佳に顔面をグーで殴られた。殴られるとは思っていなかったたので、避けることも受け身をとることもできずにぶっ飛んだ。

すごい痛いです……自業自得かもしれないけど……

殴った美佳は怒ったよう顔で真っ赤にして自分の教室に戻っていた。

この一連のシーンを見ていた人が居なかったのが唯一の救い、不幸中の幸いだろう。

あれからなんとか立ち上がった俺は教室に戻り、自分の席で突っ伏していた。

「おいおい、朝から何かあったのか？」

話しかけられたようなので顔を上げるとそこにはトシがいた。トシは俺の顔が腫れているのを見て何かあったことを悟ったのだろう。

「……まあな」

「そうか……聞かないでおいた方がいいっばいな。そういえば昨日

俺が複雑そうな雰囲気で曖昧に答えるとトシは何事もなかったように色々と言白い話始めていく。トシのこういう細かいことを気にしない性格に感謝しておこう。」

生徒がだいぶ来た頃に、雑談で盛り上がってきた俺達のところに朱里が来た。

「おはよートシに哲也くん。あれ哲也くんどうしたの？もしかしてその容姿を利用して女の子に変なことをして殴られたの？」

「そうだったのか!？」

「なぜそういう推測になる……トシも悪ノリしないでくれ……今の発言のせいで周りの視線が地味に痛い」

来ていきなりこれはひどいのではないだろうか……完璧にあつてはいないものの、所々合っているので自分の性格上きっぱり否定できないのが辛い。そのせいで周りからの興味の視線がなかなか消えないでいる。

「あはは、ごめんね。で誰に殴られたの？」

謝ってから小声で質問してくる。小声になったお陰で聞こえないことを悟り視線がだいぶ無くなっていく。

「別に誰でもいいだろ」

「えー教えてくれたっていいじゃん」

俺が素っ気なく答えても気にしないように聞いてくる。正直うざったくなってきたので、

「もったいない気もするけど、まあいいや。ここで歓迎会の賭けの権利を使う。これに関してこれ以上追求するな」

一つ命令できる権利を使うことにした。

「聞いたかったけどそれを使われちゃあしょうがないか……じゃ自分の教室戻るね」

そう言つて朱里は出ていった。

数分後にはチャイムがなつて担任の岡嶋先生が入ってきた。

「さつさと席につけ。……じゃあ出席とるぞ」

岡嶋先生が名前を呼び生徒が返事をする。そして全員の名前が呼び終わつたところで連絡事項を述べていく。

「今日は午前は昨日とかと変わらずに授業をする。んで午後からは魔法を使う授業をするからな。集合場所を間違えたり、遅れりするなよ。連絡は以上だ」

クラスの人達が次の授業の準備を進めていく。俺も準備しようとしたところに岡嶋先生から声がかかる。

「楠木、ちよつと話がある。授業の準備が終わつてからで良いから学園長室に來い」

岡嶋先生は俺にそう伝えると教室から出ていった。

俺はできるだけ急いで準備してから学園長室に向かった……

## 第十二話 呼び出し（後書き）

最近更新速度が上がらない……

部活が辛くて眠気がひどいなか書いているので文章がひどい様な気が……って言う言い訳をいってみたりします。

感想・評価していただいたら嬉しいです。

## 第十三話 嫉妬（前書き）

開いてくださりありがとうございます。

誤字脱字あったら報告お願いします。

### 第十三話 嫉妬

俺は今、自分の教室を出て学園長室へと向かっている。

ここから学園長室までは以外に距離がある。そのため俺の足取りは自然と少しばかり速くなっている。

階段を降りていき、学園長室がある1階にたどり着きその場所へと向かおうとすると後ろから声がかかる。

「あつ、楠木くん」

「会長、それに夏目さん。どうしたんですか？」

振り向くとそこには優姉と夏目さん、そして付きまとうような男子がその後ろに多数いる。教材を持っているところを見ると移動教室のためにこの階に来ているのだろう。

「どうしたって、見かけたから声をかけたの。用事も少しあつたし。迷惑だった？」

「それは迷惑でしょう。優奈に声をかけられて喜ぶ人はその容姿のみに興味がある人だけです」

表情もあまり変えずにそういう風に言った夏目さんに苦笑してしまふ。

きつとこの言葉は後ろの人に向けて言ったものでもあるのだろう。誤解が無いように一応言うておくが、優姉の性格はとても良い。

文武両道で何でもできるのにそれを鼻にかけることもない謙虚さ。

誰にでも隔たりなく優しく接する人当たりの良さ、あげていくと切りがない。

それだけ後ろの人達がうざったいのだろう。

ちなみにその後ろの人達はというと、俺に向けて嫉妬めいた視線がぶついている。殺気のようなものまでぶつけてくるものもいる。

「なにその『あなたはいるだけです』に迷惑です』みたいな言い方は！」

それを知ってか知らずか優姉は夏目さんに文句をつける。



「気のせいですよ。それより楠木くんに用事があつたんじゃないんですか？」

夏目さんはそんな文句を気にすることもなく、話を戻した。

「そうだった！今日の放課後、話しがあるから生徒会室に来てね。内容は主に新しく生徒会のメンバーになるあなたたちの紹介よ」  
後ろの人達は生徒会という言葉に反応する。

『何であいつが！？』だの『あり得ない……』など反応は様々だが俺を見る視線は、ほぼというか全員鋭くなった。

「分かりました」

俺はこの視線に負けてはダメだと思いそれを受け流して返事をした。

「じゃあ、放課後ね」

そう言つて二人は歩いていった。

「おい」

俺も学園長室に行く途中だったことを思いだし歩き出した。さつきまで後ろにいた人達の代表者？の声はスルー。だつて面倒臭そうだし。

「呼びかけてるんだから反応くらいしろよ」

すれ違い様にそう言つて肩を掴もうとしてくるが、俺はそれをひらりとかわして何事もなかったように歩いていく。

だが一人をかわしたからといって相手は多数。すぐに囲まれて歩みを強制的に止めさせられる。

逃げようと思えば逃げれるが、後々面倒ごとが増えるだけだろう。

俺は思わずため息をついてしまった。

こんな面倒なことが日常的に起こるのは正直なところ勘弁してほしい。

自分が思っていた以上に生徒会というのは大きい存在だった。

生徒会の存在というよりはそこにいる人たちの存在かもだが……

「それでなんででしょうか？急いでいるので、何もなければいいんですけど。すごい邪魔です」

苛立つのは仕方がないと自分を納得させる。

「先輩に対する話し方がそれか？」

「こいつの態度ムカつくわ」

「礼儀つてもんを知らないのかね」

なんか色々とめんどくせえ……そんな言い方されるとさらに苛立つわ。

「礼儀くらい知っていますよ。ただあなたたちには使う必要がないと思っただけです」

てな感じで挑発ぎみに俺は言った。

「調子こくなよガキが！！」

「お前うぜえんだよ！！」

「なあ、みんなでこいつに礼儀つてもんを教えてやろうぜ」

「いいな、それ。やっちまおうぜ」

男達はニタニタと嫌な笑みを浮かべる。どんだけ短気なんだよとか思っているうちに一人が殴りかかってきた。

右、左と振るわれる拳を難なくかわしながら状況を把握する。

人数は6人……全員大したこと無さそうだ……良くても今殴りかかっているやつくらいだろう……そんじゃ、速攻で決めて学園長室に向かうとしましょう！

俺はいったん相手と距離をとり……足を体気で強化する。

強化している間にも当然相手は向かって来ていた。そして相手が俺との距離を詰めて右の拳が俺の顔に当たる

「ぐっ……」

わけもなく俺は上体を下げてそれを避けて、鳩尾に拳をいれる。相手はそのまま崩れ落ちる。要するにさっきの呻き声は殴りかかってきたやつのものだ。

「てめえ！」

そんな感じで叫び突っ込もうとする。が俺は相手が一步踏み出す前に、すでに間合いを詰めていて、愕然としている相手に蹴りを横に降るって脇腹に叩き込む。

そしてそのまま廊下の壁にぶつかり倒れる。

残りの四人の方を向くと唾然として呟いていた。

「あの二人が一瞬で……」

まあそういう風に言いたくなるのも分かる。さっきの二人は残りの四人と比べると格段に体格が良い。

それに俺は制服を来てるため鍛え上げた筋肉も見えないので、さっきの二人と比べたら明らかに劣ってみえる。

その二人があんなに簡単にやれてしまえば唾然としてしまうのも無理はないだろう。

めっちゃ弱かったけどねー

そんなことを思いつつ俺は残りの四人を睨みつける。

するとビビったようでガタガタとしながらも早足で横を通りすぎていった……

俺は未だに起き上がれない二人を無視してそのまま学園長室へと向かった。

学園長室に着きとりあえずノックする。

「はい、どうぞー」という舞さんの声を聞き俺はドアを開ける。

「失礼し……うわぁっ」

部屋に入ろうとした瞬間に舞さんが飛び付いてきたのでとっさに体をそらしてかわした。

「うう……ひどいよ哲ちゃん……」

「すみません。ビックリしてしまって、つい」

「つい……じゃない。哲ちゃんのはか！」

涙目になっている舞さんに軽く罪悪感を覚えつつ謝る。

しかし何で俺が謝らなければならぬのだろうか？しかもバカとまでいわれた……理不尽なような気がしてならない……

「ホントにすみません」

そう思いつつも謝ってしまうのは自分の性格ゆえだろう。

「まあ良いわ。それじゃ、そのソファに座って待ってて」  
促されるままに俺はソファに座る。

一瞬待つてての意味が分からなかったが岡嶋先生が来てないことを把握して意味を理解する。

しかし俺より先に教室を出たのに何で俺よりつくのが遅いのだろうか？さらに俺にはゴタゴタがあったのに……

待つこと数分岡嶋先生はやって来た。

格好は防具をいくつかつけていて、剣を腰にかけている。いかにも戦闘しますよって言っているような格好だ。

舞さんに顔を向けると、俺の思考を読んだのかどうかは知らないが舞さんはただにっこりして言った。

「これから哲ちゃんには岡嶋先生と模擬戦をしてもらいます」

第十三話 嫉妬（後書き）

メリークリスマス！

とはいっても作者はいつもと変わらない日ですが……

リア充な人には思わず嫉妬してしまいますw w

感想・評価していただいたら嬉しいです。

## 第十四話 魔空技（前書き）

開いてくださりありがとうございます。

久しぶりに連日投稿が出来ました！！

今回は戦闘描写に初挑戦！

書いてみるとホントに難しいですね……

誤字脱字あったら報告お願いします。

## 第十四話 魔空技

「これから哲ちゃんには岡嶋先生と模擬戦をしてもらいます」  
舞さんから言われた一言。当然のようにその理由を尋ねる。

「なんで岡嶋先生と模擬戦をやる必要があるんですか？」

「哲ちゃん的能力確認よ」

「能力確認、ですか？」

そう言っただけは首をかしげる。

「そうよ。入学前に見せてもらった手紙によると哲ちゃんは『氣』  
を扱えるでしょ？」

「はい、一応ですけど……」

俺は控えめに頷く。後ろの方では岡嶋先生が興味を持ったような視線を俺に向けている。

「その力は結構珍しいものだからね。今日の午後の模擬戦でその力  
を使ったらみんなの注目の的になるわ」

少し想像してみた……

みんなが群がってくる……俺は囲まれる……質問攻めにされる……  
とても面倒臭そうだった。

「……出来たらそれは避けたいですね」

「そういうと思った。今回の模擬戦は生徒の実力を確かめることを  
目的にしているのよ。だから哲ちゃんが目立つのを嫌がって本気を  
出さないと模擬戦をやる意味がなくなっちゃうの」

確かに元々模擬戦では本気を出すつもりはなかったから、言われて  
いることはもつともだ。

「それと……」

「俺がお前に興味があるからだ。授業を教えているよりこっちの方  
がずっと面白そうだ。兎に角戦るぞ。異論は認めない。俺を退屈さ  
せないでくれよ楠木」

舞さんが何か言う前に挑発的な言葉を述べ、自信に溢れたような笑

みを浮かべてくる岡嶋先生。

「異論も何も俺も久しぶりに本気でやれるわけだし……こちらこそ  
楽しませてもらいますよ」

俺は岡嶋先生からの挑発に乗らせてもらうことにした。まあ挑発な  
んかなくても戦<sup>や</sup>るつもりだったけどね。

「やってくれるようでホツとしたわ。じゃあ闘技場に行くわよ」

俺と岡嶋先生は舞さんの言葉に頷いた。

闘技場。

それはどこの魔法学園にも設備されているところで模擬戦など魔法  
を安心して使う場所として建てられた。

位置としては学園の一部として建てられているのですぐに着いた。  
形状はスタジアムみたいな感じで観客席が設置されている。当然今  
は誰もいない。

観客席に被害が出ないように、周りには魔法から守るための結界が  
張られている。

広さはサッカーコートが余裕で10個くらいは入るだろう。

その真ん中辺りに俺と舞さんと岡嶋先生は立っていた。

「それじゃあルールの説明ね。攻撃手段はなんでもあり。まあ殺す  
ような所まではやらないように気を付けてね。勝敗はどちらかが降  
参するか、私が戦闘不能と判断した場合のどちらかね。まあこんな  
ところかしら」

「分かりました」「了解」

俺と岡嶋先生はその説明に頷きお互いに距離をとって戦闘態勢をと  
る。

俺は拳を構えて、今のうちに『体氣』で脚を強化する。岡嶋先生は  
腰にかけていた剣を構える。

「私が合図してから始めてね」



数秒間の沈黙が流れる。そして……

「はじめっ！」

舞さんの声が響いた。先に動いたのは岡嶋先生。

……速い！！

生身とは思えない速度で岡嶋先生は俺との間合いを一気に詰めて横に剣を一閃してきた。

俺はそれを後ろにステップを踏んで、避けた。

避けたはずだったが、何か強い衝撃を受けて後ろにぶっ飛んだ。

俺は驚愕しながらもすぐに態勢を立て直す。俺の表情を見て岡嶋先生は嫌な笑みを浮かべて言った。

「雑魚なら今ので終わる威力だったんだがな……よく避けた、とでも言っておくか。そのお礼に少しだけ教えてやるよ。今のは『かまいたち』。この魔法剣に備わっている一つの力だ」

「魔法剣ですか……それにしても種を明かすなんて余裕ですね」  
魔法剣。

それは魔法をいくつか記憶させることのできる特別な剣。通常詠唱する必要のある魔法をイメージして剣に魔力を込めるだけで放つことができる。しかもノータイムで。詠唱をして放つ魔法より威力が劣る、記憶させることのできる属性は一つと決まっている、という欠点があるがその力は強大なものだ。

前文に述べたように特別な剣で、数が少なく貴重な素材……ミスリルが使われている。

そのため持っている人はそう多くないはずなのだが、それをこの先生は持っている。

「実際余裕だしな。それじゃ続き始めるぞ」  
肩に剣を担ぎながら挑発してくる。

こいつ、マジム力つく……絶対ぶったおす！  
そんなことを思っていると岡嶋先生は何もない空間に剣を横に、縦に、斜めに振っていく。

俺はとっさに足と共に眼も強化する。

眼を強化したことによって魔力の細い三日月状の線が視えた。俺はそれを出来るだけ無駄のない動きでかわしていく。

後ろには放たれた『かまいたち』によって砂煙が発っている。「同じ技は通じないか……やるねえ。これは退屈しなさそうだ」俺の動きを見て岡嶋先生が感心したような視線を向けて俺に言ってきた。

「退屈なんかさせません。てか楽しませてあげますよ。まあ楽しめる余裕があればいいですけどね」

俺は今度はこちらからということだ『体氣』で強化した脚で間合いを詰めて足を相手の脇腹に向かって横に振る。

岡嶋先生はさっきの俺と同じように後ろにステップを踏む。

俺はそれを見てニヤリと笑う。

岡嶋先生は何かしらの衝撃を受けたように吹っ飛び仰向けに倒れる。その表情は驚愕に染まっている。

それも仕方がないことだろう、なにせ自分が使った技と同じようなものを今受けたのだから。

「今、何をしやがった……」

岡嶋先生は起き上がりながら俺に問いかけてくる。

「『氣』を使った技ですよ。『空氣』と『魔力』を混合した技、通称『魔空技』というものです。今のはさっき岡嶋先生が使った『かまいたち』を参考にさせてもらって放ちました。言っておきますけどこの技はレパートリー豊富ですから、先生もたぶん退屈なんてしないで済むと思いますよ」

俺は丁寧に説明してあげた。舞さんは「哲ちゃんも使えたんだー」的な目線を向けていた。

そう、これが姉さんからの修行で体得した『氣』の利用法の一つの『魔空技』。

少ない魔力でも『氣』を利用することによって大きな力となる便利なものだ。

魔力が少ない俺にはピッタリというわけだ。

「それでは、今度は少し思い切りいきますからね。俺を退屈させないでくださいよ」

俺は岡嶋先生の言葉を真似するように言って、次の行動　手に意識を集中する。

『空気』を野球ボールぐらいの大きさをイメージして集め、凝縮する。

その間に岡嶋先生は何もしないわけもなく、切り上げるように剣を振る。

すると先生の目の前に小さな竜巻が……だんだん大きくなって大きな竜巻が発生する。

俺は構わず焦らずに『空気』の凝縮を続ける。

竜巻は砂煙を立たせながら俺に迫ってくる。

俺はぶつかるギリギリの所で『空気』の塊に風の魔力を込めて目の前にある竜巻に向かって、岡嶋先生に向かって投げた。

その球体は竜巻に穴を空けて岡嶋先生の所に向かっていく。

「ぐわーっ」という声と空気が切り裂くような風切り音が聞こえたので恐らくヒットしたのだろう。

ちなみに岡嶋先生の放った竜巻は穴が一瞬空いただけで消えたわけではない。

つまりその竜巻は俺を巻き込んでいく。

そしてそのまま俺は竜巻の風に切り刻まれ、飛ばされる。

そのまま上に吹き飛ばされ重力によって地面に激突、痛いけど俺は地獄の特訓いろいろとあってタフということと瞬間的に『体氣』で全身を強化したため平然と立ち上がった。

岡嶋先生は腹を中心に防具が切り刻まれたような跡を付けて気絶して倒れている。

今の技は『魔空技』の一つで『戦吼弾・風』である。球体状に凝縮した『空気』に魔力のどれか一つの属性を込めた球体を相手に向かって投げつける技である。

形のイメージ的にはNA　UTOの螺　丸と言えば分かりやすいだ

ろう。

使うまでに少し時間がかかるのと、軌道が読まれやすいので避けられやすいという欠点があるが威力は絶大。直接ぶつけてると自分に被害があるくらいだ。この技は個人的に気に入っている。

「勝負あり。勝者哲ちゃん」

キリッとした声音で告げる舞さんだが、「哲ちゃん」という響きのせいで台無しだ……

そんなことを考えながら俺は岡嶋先生に近づく。舞さんも俺の後に続く。

「岡嶋先生、大丈夫ですか？」

俺は岡嶋先生の意識を確認するが、反応はない。すると舞さんが「とう！」という掛け声とともに跳びあがり……

「がはっ」

岡嶋先生の腹の上に両足で着地する。これは舞さんがいくら小柄で体重が軽いといっても痛いだろう……

「ごほ、ごほ……なに、しゃがる」

「だって起きないんだもん」

その衝撃によつて目が覚めた岡嶋先生はせき込みながら、ものすごい形相で舞さんを睨みつけ文句を言う。

それを意に介した様子もなく飄々と屁理屈にもなっていない言い訳を言う舞さん。

「それにしても思ったよりあっさりと終わっちゃったね。哲ちゃんはまだまだ余力がありそうだし……まあ面白かったからいつか。授業に遅れすぎるのもなんだし教室に戻ろっか」

さらには呆れた調子で岡嶋先生にそう言つて俺の手を掴んで引つ張つていく。俺は少し狼狽してしまつたが、それに抵抗することもなくそのまま舞さんと共に闘技場から去つていった。

余談だが岡崎先生がまともに動けたのは数時間のことだった……  
つまりそれまでずっとポツンと一人で闘技場の地面に倒れ伏してい  
たということである……

## 第十四話 魔空技（後書き）

主人公の技を披露しました！どうでしょうか？

「おおっ」とか思わせることができたらいいなーとか思っています  
が、氣というありきたりなものでは難しいですよね……アイディア  
がない作者ですいません。

感想・評価していただいたらうれしいです。

## 第十五話 屋上（前書き）

開いてくださりありがとうございます。

誤字脱字あったら報告お願いします。

## 第十五話 屋上

今俺と舞さんは2人で闘技場から出て学園に向かっている。ちなみに舞さんは未だに手を放してくれない。

さつき離してください的なことを遠慮気味に言ったのだが、涙目でも上目遣い見つめてきて「……だめ？」と捨てられた子猫みたいに言われあえなく了承してしまった。

了承した瞬間輝かんばかりの笑顔を向けられたので、良しとしてしまっ俺は甘すぎるのかもしれない……

閑話休題

俺はちよつと質問があったので聞いた。

「あの、俺って今日の午後にある模擬戦に参加するんですか？」

「もちろん、参加してもらおうよ！」

舞さんは俺の質問に笑顔で答えるが、俺はその答えに対して不満な顔を向ける。

だって、それじゃあなんでさつき戦闘したんだよ、と思ったからだ。俺の表情から察したようで舞さんは俺に告げた。

「戦う前に言っただけさ。さつきのは今日の午後にある模擬戦だけだと哲ちゃんのが測れない。だからそれを今やったってだけ。午後にある模擬戦には本気を出さなくても良いから参加してもらおうよ。なにせ授業の一環だからね。評価はさつきの模擬戦を見て決定して

るし、午後の模擬戦では負けても影響はないわ。もし模擬戦をさぼったりしたら、補習として私と一緒に夜な夜な二人きりであんなことや、こんなこと、そしてさらに……ってことになるわよ？」

「一体何の補習ですか……まあ、安心してください。ちゃんと参加しますから」

俺は言われたことに苦笑いしながら参加することを告げる。すると舞さんは俺の元に顔を近づけて

「……補習は、自主参加しても良いからね」



そう囁いて顔を離す。そして俺にウィンクしてから、「じゃーねー」と手を振り走って学園へと戻っていった。俺はその行動に授業があるということを忘れて呆然としてしまい、その場に立ち尽くしてしまった……

結局午前中の岡嶋先生との模擬戦と舞さんの誘惑？のせいで時間を食われてしまい、教室に戻ってきた頃には、3限目の授業終了時間までもうすぐだった。

この学園の授業は午前3限があつて、間に昼休みが入り、午後3限の6限授業となっている。つまり俺が戻ってきた頃にはすでに午前の授業がほとんど終わっている時間だった。

そんな時間帯に教室に一人で戻るのも気が引けるので、昼休みになるまで適当に時間を潰すこと決めた。とりあえず人のいなそうな屋上に向かうことにした。上を目指して階段を上る。

『立ち入り禁止』と書かれている看板を無視してその扉を開けた。かぎは掛かっていなかったの、すんなりと開けることができた。すると風が俺の体を通り過ぎ、そしてきれいな空が目映った。今日は雲一つない快晴だ。

なんと心地のいいところだろうか……そんな感想を持つ。俺は自分から出てきた衝動をそのままに地面に寝転がった。

コンクリートのひんやりした温度が心地よくて出てきた睡魔に身を任せて瞼を下していった……

「……あのー、すみません……うーん、反応がないなあ……」  
誰かが声をかけている気がする。

「えーと、あのー……………よわったなあ……………」  
女の子の声だ。弱々しく、そして困惑したような声。

つん、つん。

指先で頬をつつかれる。この子は一体何がしたいのだろうか？

つん、つん。

再び頬をつつかれる。見知らぬ人なんだから気にしなきゃいいのに。屋上にいるにしても広さはあるんだから邪魔ってことはないだろうし……………

少し間が空いて今度はじつと見つめるような視線を感じ始めた。目を逸らすことなくただじつと見つめる視線を。

さすがに居心地が悪くなってきたので目を開けて声をかけようとした。そう、かけようとしたのだが、俺が目を開けた瞬間、女の子は「きゃあ！」という可愛らしい声をあげて、すごい勢いで俺から距離をとった。距離をとったお陰でその子の姿がよく見えた。

見た目はとても小さく可愛い。身長は舞さんとそう変わらない。髪は綺麗な白色で肩にかからないくらいの長さだ。こめかみの右側についている黄色い星の髪飾りがすごく似合っていて特徴的だった。

「……………えーつと、あの……………その……………ごめんなさい……………」

「こちらこそ、すみません」

そしていきなり頭を下げてきた。俺もとっさに謝り返してしまう。

「いえ、私が悪いんです。あなたが謝る必要はないですよ。それで、えと、何でこんなところに来ていらっしゃるんですか？」

所々言葉につまりながら話しかけてくれた。

「……………暇だったから？」

なぜに疑問系と自分でも思いながらそう答えた。

「そうですか……でも、ここ立ち入り禁止ですよ？」

「はい、そうですね」

俺は忠告にでも来たのだろうかと考えつつ、悪びれることもなく答える。

「ここって良いところですよね、私はよくここに来ます」

女の子は俺の予想していたことと違うことを言ってきた。

「俺も良いところだと思います。何でここを立ち入り禁止にするんでしょうね」

「私もよく疑問に思います。立ち入り禁止にする訳を教えてくださいたいです」

この女の子は一見気が弱そうに見えるが（実際弱いのだろう）自分の意思はしっかりと持てる子のようにだ。

「その口調からすると先輩はこの常連のようですね。立ち入り禁止と書かれているのに悪い人ですね」

「それは！……その……うっう……」

俺がそう言うと、女の子はそのまま俯いてしまった。てか俺も人のことを言えたもんじゃないけどね。

それにしてもよくこの気の弱さでここに来ているものだなと思った。「安心してください。誰かに言ったりはしません」

そう言うと、とたんに女の子はパツと顔を上げる。

「本当ですか!？」

「……ええ、もちろん」

「ホントにホント？」

「嘘は言わない主義です」

「そうですか……安心しました」

その言葉通り心底ホツとしたような顔を浮かべている。

「それでは、次の授業に遅れると面倒なのでお先失礼します」

昼休みも終わりそうだったので模擬戦が行われる闘技場に向かうため、屋上から出ようとした。

「あの一！」

そして立ち去ろうとした俺を女の子が呼び止めてくる。

「何ですか？」

相手が相手なのでビビらせないようにできるだけ優しく応える。

「えっと、私は鷹たかい巳ももか百花ももかって言います。あなたの名前を伺ってもいいでしょうか」

「……楠木哲也です。それでは……」

俺は名乗った後、今度こそ屋上から出た。

第十五話 屋上（後書き）

感想・評価していただいたら嬉しいです。

## 第十六話 テンパリ（前書き）

開いてくださりありがとうございます。

誤字脱字あったら報告お願いします。

## 第十六話 テンパリ

「おーい、哲也」

「……トシか」

学園を出て闘技場に向かう途中名前を呼ぶ声に振り向くと、トシが後ろから走りながらやってきた。

歩きながらトシと会話、雑談をしていく。その中の内容の一つとしてやはりというか午前中のことを尋ねられる。

「そうだな……ぶっちゃけて言うと担任と模擬戦をした」

正直ぶっちゃけてよかったのかは謎だが、口止めもされてないことだし別にいいだろうと判断する。

「模擬戦！？しかも担任って岡嶋先生とか？」

「そうなるな……」

間違ったことを言っているわけではないが、すごい勢いで迫ってきたので少しひきながらも頷く。

「勝ったのか!？」

「……勝ったよ」

「マジかよ……」

驚愕の顔を向けてくるトシ。この反応だとあの担任は結構強いのか？確かに弱くはなかったけど、本気を出す必要もなかったし……強いとはいない難かった。自分の力を測る基準が姉さんなのもそうなる一つの大きな理由かもしれないが。

「岡嶋先生って強いのか？」

だからとりあえずは聞いてみることにした。

「ここにいる教師は生まれが良い人が多いんだよ。生まれが良くなくても元々の才能が高い人しかいないし。だからみんな結構強いはずだ。確か岡嶋先生は『六家』の『風切家』の分家の一つの生まれで、教師の中でも高い位置に属しているんだが……それに勝つってお前ってハンパなく強いみたいだな」

岡嶋先生は結構強かったらしい……

さっきのはあんまり言うべきことではなかったかもしれない。

「俺のことも置いとくとして、できるだけ俺と岡嶋先生が模擬戦したことは言わないでおいでくれよ」

「おーけー。確かに言いふらすことでもないしな。元から言つつもりもないし安心していいぜ」

「頼むぜ、目立つのは正直に言うのと面倒だからな」

口止めするよう言うとトシは快く了承してくれた。

俺のぼやきみたい言葉にトシは苦笑いを浮かべていた。

闘技場に入るとすでにほとんどの生徒が集まっていた。

自分の武器の手入れをしている者、小さな魔法を行使して今日の自分の調子を確認している者、体をほぐすために準備体操をしている者、と様々な様子が見て取れるが、共通して気合が入っていることが分かる。

「みんな気合が入ってるね」

「そりゃそうだよ」

「そういう割にトシはそこまで気合が入ってるようには見えないけど？」

「今からそんなになってたら、やる時にはばてちゃうそうだからな。その時に力がちゃんと発揮できるように上手く調整してるわけだ」

「なるほど」

トシはこの様子を見ると結構冷静みたいだ。

「なーにかっこつけちゃってるの、よ！」

ズガン！！

「おわ！」

トシの背中に後ろ飛び蹴りをかます、お転婆娘が一人。それをやる



のは俺が知ってる限りで一人しかいない。

「朱里か」

「やあやあ、哲也くん。今日も良い日だね」

爽快！とでも言うようにさわやかな笑顔をこちらに向けて親指を立てて言ってきた。

「俺は最悪だ！毎回毎回飛び蹴りかますのやめやがれ！」

喰らったトシはというと、さっきまでの冷静さが嘘のように吹っ飛んで文句を言い放っている。

「嫌に決まってんじゃない。だって蹴りたくなるんだもん。ねー、哲也くん」

「いやそこで俺に同意を求められても困るんだが……」

「哲也くん、そこは頷いて良い所だよ！だって蹴られやすいトシが悪いんだもん」

なんていい加減なとか思ってしまうのは当然のことだろう。相変わらずのマイペースぶりだ。

「全くもうちょっとそのいい加減さどうにかならないの？観てるこっちが恥ずかしいわ」

それを咎めるような口調で言い放つ赤い髪的美少女が一人やってきた。

その美少女が来たときに、トシが一瞬硬直したのを見て、人の悪い笑みが出そうなのを我慢しながら俺はいじる内容が出来たとか考えていた。

「遅いよ、美佳」

「遅いよって言われてもね……朱里がその人を見つけた瞬間、いきなり走りだして飛び蹴りをしにいったんだから、あなたより遅いのは仕方ないと思うのだけけど？」

少し呆れたように美佳は朱里に向かって言った。

「確かにそうだね」

その呆れた様子に全く動じることなく朱里は肯定した。

「てかなんで美佳と朱里が一緒なんだ？」

俺は率直に思ったことを聞いてみた。なんか見たことのないペアだしな。

「なんでって言われても、同じクラスで仲が良くなった、としか答えられないわよ」

「……なるほど」

少し納得するのに時間がかかったのは、この二人はあんまり馬が合いそうにないと思ったからだ。きつとそう思ったのは俺だけではないだろう。

「あの、火神さんでいらっしやいますよね？私わたくしは晒科利幸わたくしって申し上げます。よろしくお願いしますです」

さっきまでの怒りはどこへやら、なんだか緊張しているようで今にも声が裏返りそうになりながら、いきなり美佳に自分の自己紹介をするトシ。

なんでここまで緊張するんだろうか？てか明らかに敬語がおかしくなってるし……

「こちらこそよろしくね。トシくん、でいいかしら？」

「はい！それでよろしいでございます！」

トシの敬語になっていない敬語に動じることなく笑みを向けている美佳。

その笑みに顔を赤面させ、あわてて返事をするトシ（今度は完全に声が裏返ってしまっていた）。

どちらか俺の印象と違いすぎていて、俺は笑うのを必死に耐えている。

朱里はというと、トシの様子に腹を押さえながらしゃがみ込み肩を震わせて笑っている。まあ朱里にはよく抑えていると言えるだろう。

「全員こちらに注目してください」

面白おかしくなった雰囲気（とはいっても俺らの所だけだが）闘技場に舞さんの声が響く。

言われた通り声が聞こえた方向に目を向けると観客席の方に舞さん

と先生方が6人いた。

「これから今日やる模擬戦について、説明をしたいと思います。今日はチーム戦でやりたいと思うのですが……」  
周りを見渡しながらしゃべっている舞さん。

「とりあえず四人一組のグループを作ってください。グループがでない人はこちらに来てください。私たちが適当に決めたいと思います。残りの説明はグループが出来てからにします。まずはグループを作ってください」

舞さんがそう言って呼びかけると生徒たちは動き始めた。

俺たちは丁度良く四人がそろっていたので、俺はこれで良いだろう  
と思い三人に問いかける。

「俺たちはこれで良いよな？」

「私は良いわよ」「もちのろんよ」「おう」

俺の問いかけに三人とも気持ちの良い返事を返してくれた。

## 第十六話 テンパリ（後書き）

感想・評価して頂けたら嬉しいです。

それが影響させられるかは作者の腕的に出来るが分かりませんが、この作品にアドバイス等あったら言ってくれとありがたいです。

## 第十七話 再び嫉妬（前書き）

開いてくださりありがとうございます。

明けましておめでとございます。今年もこんな作者に付き合ってくれたら嬉しく思います。

ユニーク数10000突破しました！読者の皆様ありがとうございます。

誤字脱字あったら報告お願いします。

## 第十七話 再び嫉妬

俺らのグループが決まって十数分が経ち、ようやく他の人達もグループも決まったようで舞さんが説明を再開する。

「みなさんグループが完成しましたね？それでは説明を再開します」  
ここにいる生徒たちの意識は自然と舞さんの方へと向いていく。

舞さんもそれを感じ取ったようで満足気に頷きながらそのまま説明を述べていく。

「まず四人組を作った理由はさつきも言ったように今日の模擬戦はチーム戦でやるためです」

舞さんの説明途中に、ここにいるほぼ全員がチーム戦という言葉に反応する。反応は様々で安堵する者や喜んでいる者がいれば、片や不満を隠せない者やがっかりしている者もいる。

「なんでチーム戦なんだよこのチビ学園長が！とか思っている人もいるようなのでその理由もしつかり

説明するので安心してください」

不満がある人はいるみたいだけど、少なくともそこまで切れている人はいないと思うのだが……

「まず個人の模擬戦にしてしまうと、もし魔法の打ち合いになるとしたら確実に両者とも呪文の短いものを選ぶことになるでしょう。

そうすると魔法技能の中の詠唱の早さに勝者が偏ることになると思われるからです。それ以前にまだまだ未熟なあなたたちでは、詠唱している間に武力的な行動を起こされたらそれだけでやられてしまいます。そうなると肉弾戦ばかりになる恐れがあるからです」

舞さんのこの説明に、なるほどという呟きも聞こえれば、まだ納得できないという表情を見せる者もいるようだった。

「それに今回の模擬戦では、あなたたちの総合的な力を見たいのです。肉弾戦になってしまうと全く魔法技能について評価できないという可能性ができてしまいます。しかしチーム戦ならば肉弾戦だ

けになるという可能性がだいぶ下がります。少なくとも全員が魔法を使わないという事態は避けられると思われれます」

続けられたこの説明には、さっきまで納得できていなかった者たちも渋々とだが引き下がったようだった。

「それにチーム戦ならば全員が大なり小なり何かしらの役目を持つこととなるので、何もできずに、何もせずにということもだいぶ減ると考えられるからです。チーム戦にした理由はこんな感じですよ。続いてはチーム戦のルール説明をしたいと思います」

ここで舞さんは一呼吸置いてから、説明を述べていく。

「最初に攻撃についてですが、基本的何でもありです。物理的に攻撃を仕掛けてもいいし、魔法を行使するのも問題ありません。ただ人を殺すような殺傷能力の高いものは禁止します」

これについてはみんな当然だろうとばかりに頷いている。

「次にこのチーム戦の勝敗の条件ですが、まずチーム内で代表を一人決めてもらいます。そして相手チームに分からないように、その試合を管理する審判にだけその代表者の名前を報告してください。

もう分かった人もいるかと思いますが、その代表者がやられたらチームの負けとなります。もちろん降参しても負けとなります。ここまでの説明で分からないところがある人はいますか？もし分からないようならチーム内の人か近くの人にでも聞いてください」

こんなシンプルな説明で分からない奴なんていないだろ……と考えていたが、舞さんの言葉をきっかけに周りがざわつきだす。

どんだけ馬鹿な奴ばかりだよと思ったら大体の人は、チーム内で代表者を決めているようだった。

だが本当に馬鹿な奴もいたようで、恥を忍んで聞いている人もいろいろだった。

数分が経ち、初めは相談だったものが説明途中ということも忘れて、段々と周りのおしゃべりとなってしまうていた。そこに「静かに」という声が先生達のところからとんできて、ようやく場が鎮まり、説明が再開される。

「戦闘する場所と対戦する相手についてですが、場所については、闘技場丸々一つを4対4に当ててしまおうと午後の授業3限分を使っても足りなくなってしまうので、闘技場を四等分してそれをひとつの戦闘場所とします。対戦している他のグループからの余波は私の結界でしっかりと守るので安心して戦えると思います。安心できねえよ！このくそ学園長！！という風に思っている人もいるかもなので少しその力を見せておきます」

そういうと周りの先生が舞さんに向かって魔法を放っていく。

生徒たちはいきなりことで訳も分からないまま悲鳴を上げたり、顔をそらしている人が大体である。

しかし受けている当人　舞さんはなんでもないとばかりに手を広げる。

すると目を凝らしてもなかなかうまく見えない薄い膜が舞さんの周りに出現する。

放たれた魔法の大体が火の魔法だったようで、その魔法による爆発音がなり、煙が立たせる。

薄い膜が見えなかった生徒達はあわてだし、ざわめきが一気に広がる。

そして煙が晴れるとそこにいたのは無傷の舞さんだったので生徒達から安堵の息が漏れ、それと同時に学園長の実力に驚いている。

「これで一応信用はしてもらえるかなと思います」

その理由としては、舞さんはなんでもないようにやってしまったが、結界魔法は光の上級魔法なので、こんな短時間であれだけの量の魔法を余裕で抑えているところを見ると、舞さんも学園長ということだけあって相当の実力者のようだ。

「対戦相手についてはあなたたちで決めて、対戦相手が決まったら私に報告してください。報告された人から私がどの位置で戦うかを指示します。これで私からの説明を終わります。それでは対戦相手が決まり次第私に報告してください。最後に言い忘れましたが対戦は1チーム1試合までですので相手は考えて選んでくださいね」



舞さんの説明が終わったことで生徒たちは対戦相手を決めるために動き出す。

当然俺らもそうしようと思ったのだが……

「これは対戦相手には困らなそうだな」

俺はそう言葉をこぼしてしまふ。

「なんとというか、嫉妬って素晴らしいね！」

トシが爽やかに言った通り、俺らは嫉妬の視線を向けてくる男子生徒達によって囲まれているのだった。

## 第十七話 再び嫉妬（後書き）

感想・評価していただいたら嬉しいです。

アドバイスなどして頂けたら幸いです。

## 第十八話 対戦相手（前書き）

開いてくださりありがとうございます。

誤字脱字あったら報告お願いします。

## 第十八話 対戦相手

「嫉妬つて素晴らしいね！」

トシが爽やかに言ったように俺らは嫉妬の視線を向けてくる男子に囲まれている。

「ん？嫉妬？」

「美佳、お前つて……いや、何でもない」

実は「鈍感なんだな」と続けようとしたのだが、美佳の何？とでも言いたげな表情を見て、言うだけきつと無駄になるだろうと思いきや誤魔化した。

その誤魔化しによってあやふやな雰囲気になるが、そこに朱里が俺らにとつても周りの男達とつても爆弾となる発言を投下する。

「しっかしさ、こっやって見るとさ、美佳と哲也くんってお似合いだよ。カップルみたいだし。周りが嫉妬するのも分かるよ」  
そういつて一人でうんうんと頷いている。

一方周りの男達はというと、朱里の発言を聞いた瞬間、数秒固まった後、より強い視線を俺にぶっ刺してくる。当たり前ながら、居心地は非常に悪い。

言われた本人の美佳はというと、当然のごとくそれに反論する。

「そ、そんなわけないでしょう！！何言ってるのよ！！」

妙にテンパっているように見えるのは、気のせいということにしておきたい。

「それに私たちは……」

「お、おい、美佳！」

俺は美佳が続けようとした言葉をすぐさま遮る。

「どうしたの哲也くん？それで私たちは、何なの？」

「えとね……兎に角違っつてことが言いたかったの！」

「そ、そうそう。そういうことだ」

美佳はさっき言おうとした言葉について、朱里から追求を受けるが、

俺が遮った理由が分かったようで、誤魔化そうとする。俺もその美佳の言葉に乗るように頷いた。

「ま、いつか。美佳と哲也くんの面白い反応見れたことで大分満足できたし、深くは追求しないわ」

明らかに怪しい様子の俺らだったのだが、朱里は何かを察してくれた。たようですぐに追求するのをやめてくれた。

そしてやっと落ち着いたと思われた空気は、存在が消えかけていた嫉妬する男達よって壊される。

「おい、お前ら」

一人が先陣を切って、隠すつもりもない強い敵意を出しながら呼び掛けてくる。すると次々と文句をぶつけてくる。

「その男二人！火神さんと一緒にいるからって調子に乗るなよ！」

「主にお前さ、何仲良くしちゃってんの？」

「そうそう、お前らと火神さんじゃ釣り合わねえんだよ」

段々と無駄に盛り上がってくる男達。それにしても美佳ってマジで人気あるんだな……とかしみじみ思う。本人からしたら、こんなやつら迷惑だろうけど。

「いやいや、そういう君たちも合わないからね。そこどころ理解した方がいいよ。火神さんに相応しいのは僕のような人なんだよ」

そこにさらに面倒くさそうな金髪野郎とその仲間達が現れて、男達に告げる。

金髪男のことを紹介するなら、育ちが良いお坊っちゃんで格下は見下すような雰囲気を持っている。金髪男に付いている三人も同じような雰囲気を漂わせている。

実際に俺らに嫉妬の視線を向けてた男達に対して、ごみを見るような視線を向けている。

個人的にこういう奴らは、嫉妬の視線を向けてた男達より気に入らない。

俺以外もそのように思っているようで、敵意の視線を金髪男とその仲間達に向ける。

しかし嫉妬の視線を向けてた男達が黙っていることを意外である。

「おやおや、火神さんならともかく君達にそんな視線を向けられると吐き気がするよ。君達みたいな愚民共は僕ら貴族を崇めていれば良いんだよ」

姉さんから聞いた知識だと、貴族とは国に対して功績をあげて王から認められ、一定以上の財力が持つとなれるものらしい。それにしても貴族はすごい存在だと思ってたのに、こういう奴らもいるんだと思うと心底がっかりだ。

俺は金髪男が言ったことに対してムカついたが気にとめることなく流そうとした。が予想外にもトシが黙ってはいなかった。

「お前さ、貴族だかなんだか知らねえけど調子に乗らないでもらいたいね」

すごい剣幕で言っているトシだが、金髪男はまるで気に介する様子がない。

「全く、貴族に向かってそんな口利くなんてね……これはお灸を据えてやらないといけないかな。火神さんが相手というのは気が引けるけどまあいいや。僕達と模擬戦をしてもらうよ」

金髪男がため息混じりにそう言うと、金髪男の仲間達はその言葉を聞いてニヤニヤしていた。

「上等だ」

どう見ても何かありそうだったが、それを考察する間もなく、トシは金髪男の挑戦を勝手に受けていた。別に受けることに関しては問題ないんだけどね。

「それじゃあ、学園長に報告をしに行こうか」

そういつて金髪男とその仲間達は先を歩いていった。俺達もそれについていく形で舞さんのところに向かった。

舞さんに戦う相手の報告をすると、戦うまで時間があると告げられ

た。

それを受けてその場を離れるのだが、俺だけ舞さんに呼び止められる。なんなんだと思いながらも話を聞くと「私ああいう貴族連中嫌いなんだよね。そういうわけで、私の代わりにぶつとばしちゃって！応援してるよ」と言われた。これは誰にも言うことなく自分の心の中にしまっておこうと思うのだった。

俺が舞さんから話を聞いて戻ってくるのと金髪男が「空いた時間にも頑張つて作戦でも考えるがいい。はーはっは」と高笑いつきで去っていったところだった。

みんなは俺が戻ってきたことに気付くと、何言われたの？と問い詰めるが、準備してあった言葉で適当にそれらをあしらった。

それからトシが少し言いつらそうにみんなに対して問いかけてきた。「あのさ、勝手に決める形になっちゃったけど……その、よかったのか？」

意味はみんな理解したようで何が？とは誰も問い返さない。

「別に問題ねえよ。俺もあいつ気にいらなかったし」

俺はさつき思ったことをそのまま口にする。

「決めたのがトシっていうのが正直ム力つくけど、あいつの相手をすることは反対しないよ」

ため息混じりに朱里はそう告げた。

「私も良いんだけど、ただ……」

美佳は賛成はしているようだが、何やら歯切れが悪い。

「ただ、どうしたんだ？」

「……他の三人に関しては分からないけど、あの金髪男は相当強いよね……」

「へえー、そうなんだ」

俺は軽い感じで応えるが、美佳が強いと言つとなると、油断はできないので気を引き締める。

「ええ、それと性格とかを考えて、確実に彼が代表をするでしょうね」

「だったら一気にあいつをぶっ飛ばせばいいんじゃないか？」

美佳が予測を言った後に、トシが何故か俺を見てそうみんなに言う。その視線はお前があいつの相手をしろと訴えている様に見える。もちろん無視するが。

「他の三人の実力がわからないとなると、その作戦は厳しいわね」  
しかしきっぱりと美佳に否定されたトシは項垂れる。

「じゃあ、なんかいい考えとか無いの？」

「んー……誰かがあいつを倒せなくてもいいから一人で押さえ込んで、その間に他の三人を一気に蹴散らして、最後にみんなであいつを叩くっていうのはどうかな？」

朱里が痺れを切らしたようだと美佳に詰め寄りながら聞いている。

その姿に美佳は落ち着いてとばかりに手を前に出して朱里を抑えようと、少し考えた末に自分が思う作戦を伝えた。

「俺はそれでいいと思うぞ」

その作戦に俺が最初に頷いて見せると、他の二人も同じように同意する。

「決まりね。でも問題は誰があいつの相手をするかよね……後私たちの中からも代表を決めないと……」

美佳は困った表情のまま呟くと、少しの間俺らの場を沈黙が支配する。

俺は思考を深めていいアイデアが出たのでみんなに伝える。

「それじゃあ、こつこつのはどうだ？」

そして俺らのグループが呼ばれる……





## 第十八話 対戦相手（後書き）

感想・評価していただいたら嬉しいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0209z/>

---

Dropbehind

2012年1月2日08時46分発行